

令和6年度

3年留学生

卒業論文集

2025.1.31.完成

令和6年度 3年留学生「卒業論文」 目次

	テーマ	著者
1	人間の心の問題について	王 超
2	インターネットが観光経済に与える影響	官 宇晟
3	中国の結婚率の低下	甘 甜
4	宮地美陽子『首都防衛——知らなかったでは済まされない「最悪の被害想定」』感想及び中国現状の対比分析	胡 可可
5	中国の人口高齢化が経済社会の発展に与える影響	呉 雨欣
6	経済成長に対する技術革新の推進作用	孫 顥賓
7	日本に留学する理由	趙 寒旭
8	インディーゲームとオンラインゲームの市場発展分析	張 博然
9	青少年文化とサブカル	張 博聞
10	電子商取引とビジネス思考	陳 宇傑
11	中国の歴史	沈 澤宇
12	子供の犯罪及び教育方法	李 睿鋒
13	スマホアプリが日常生活に与える影響	李 周語
14	服飾デザインにおける革新	陸 千尋
15	鳥はなぜ飛ぶのか	龍 章豪
16	文化の多様性と都市の包括的成長の関係に関する研究	廖 佳橋
17	フィギュア真骨彫製法（しんこっちょせいほう）について	凌 浩博
18	経済学の視点から見る人間の行動の制御可能性	T・Y
19	Chinese Characters in the history and nowadays	柯 嵐軒
20	The Comparative Study of Bilingual Education Models in China and Japan	周 楚硯
21	A Balanced Reflection on China's Strength: Examining the Military, Social, and Economic Contradictions from Within	唐 銘治
22	156 years: How Hong Kong came to be An evaluation on the development of Hong Kong's political system during British colonial administration.	C・H

人間の心の問題について

王 超

心理的な問題は、個人の生活の質と社会の安定に影響を与える不可欠な部分だ。この論文では、心理的な問題の主な原因、大まかな症状や、対処、予防策などを研究し、健康的な心理環境を構築するために、理論と実践を提供することを目的としている。

WHO（世界保健機構）は健康の概念をメンタルヘルスを含むものとして定義している。社会生活が迅速化し、それに伴い心理的障害の発生率は急速に増えている。うつ病とか、不安障害とか、強迫性障害などは現代のライフスタイルにおいて大きな脅威となっている。心理的問題の原因、発生の仕組み、そして対応策を探求することは、個人と社会の健康を促進させる重要な方法だと私は考える。

生物学的には、メンタルヘルスの障害を引き起こす要因の一つとして、遺伝的な原因がある。他にも脳の機能や不均衡、神経伝達物質の不均衡が関係がある。例えば、うつ病の人々には顕著な様々な症状が出て、体がぶるぶる震えたり、心臓が痛いといったような症状が出たり、呼吸困難になったりする症状があげられる。つまり、心理は生理の影響と密接な関係にあると結論を出すことが出来るのだ。

個人の心理的特性や考え方は、メンタルヘルスに非常に重要な役割を果たしている。否定的な思考、低い自尊心、そしてネガティブな発想は、しばしば心理的問題と関連してきている。さらに、子供時代のトラウマやストレスは、深い心理的影響を与え、個人を脆弱にさせることがある。

次に、社会的環境もメンタルヘルスに影響を与える重要な外的要因の一つと言える。家族間の対立や、人間関係の問題、経済的なストレスや、社会的不平等さを感じる状態などは、心理的なストレスを引き起こす要因となりうる。現代社会における情報過多や競争の激化、ソーシャルメディアの悪影響も、メンタルヘルスの問題を悪化させている。

一般的な心理的問題には、うつ病、不安、怒り、恐怖などがある。うつ病は、気分が落ち込み、日常生活に興味を失うことが特徴であり、不安障害は、絶え間ない緊張や不安によって特徴づけられる。心理的な問題は、集中力の低下とか、記憶力の低下とか、すべてに対する否定的な見方など、個人の認知能力にも影響を与えている。メンタルヘルスのケアに悩む人々は、社会的に孤立しがちであり、過度に他者依存をしがちでもあるため、自己破壊的な行動をとることがある。生理的には、不眠、頭痛、食欲不振、慢性的な疲労などの反応も伴うことがある。もし周囲の人々にうつ病の症状が見られたら、家族や友達の助けが、その個人が抱える心理的なストレスを大きく軽減することができる。簡単な方法として、家族から圧力をかけないために、本人にとってより良い言い方を探し、より柔らかい言葉を使うことだが重要となる。そしてできれば十分な関心事を与え、今の自分の状態からリフレッシュさせることが必要になる。そうすれば家族からの助けがより効果的になる。友達ならば、デリケートな話は絶対にせず、例えば彼にとって楽しいことを話すとか、一緒に遊んで楽しむとかの時間を一緒に過ごすのが良いだろう。傍にいてあげるだけで充分なのだから。

メンタルヘルス教育を通じて心の素養を高めることで、心理的問題を減らすことができる。心の健康の重要性を促進し、これらの問題が解決不可能ではないことを理解させることが重要なアプローチだ。良い解決方法を探すならば、規則正しい生活習慣、適度な運動、健康的な食事を取り入れることで、メンタルヘルスを改善することができる。また、瞑想や深呼吸、タイムマネジメントなどの感情管理のスキルを習得することも、メンタルヘルス問題を予防する効果的な方法なのだ。メンタルヘルスの問題は、生物学的、心理的、社会的要因が複雑に絡み合っている。問題の多様性により、個人の感情、行動、認知

に影響を与えるだけでなく、社会にも広範な影響を及ぼす可能性があり。したがって、心理的問題に対処するためには、多くの人々が協力し、心理療法、社会的支援、そして個人の努力を組み合わせ、最適な心理的環境を共同で構築する必要がある。これにより、人類全体の幸福感と社会的生産性が向上することになるはずだ。

犯罪心理学は、個人が犯罪を行う内的動機を明らかにすることを目的としている。犯罪心理の形成は、個人的要因と社会環境の相互作用の結果だ。個人的要因には、人格特性、情緒調整能力、認知の偏りなどが含まれる。例えば、反社会性パーソナリティ障害を持つ人は、共感の欠如や衝動制御の困難さを示し、これが犯罪行動につながりやすいとされている。社会環境要因には、家庭環境、教育水準、社会経済的地位などが含まれる。機能不全の家庭で育った個人は、効果的な情緒的支援や正しい価値観の指導が欠如しているため、犯罪の道に進みやすい可能性がある。犯罪心理の形成過程は、潜在や、萌芽や、顕在などの三つの段階を経ると考えられている。潜在段階では、個人は一部の不良な心理的傾向を持っているものの、明確な犯罪意図はまだ表れていない。外部からの刺激により、これらの不良な心理が徐々に発展し、犯罪行動への同調や欲求として現れる萌芽段階に入る。最終的に、特定の状況下で、これらの心理が実際の犯罪行動に転化する。犯罪心理が犯罪行動に転化するのを防ぐためには、個人と社会の両面から取り組む必要がある。個人の面では、メンタルヘルス教育を強化、良好な情緒管理や社会適応能力を育成することが重要である。社会の面では、健全な社会環境を作り、効果的な社会的支援を提供し、犯罪の誘因を減らす必要がある。例えば、貧困地域の教育や雇用機会を改善することは、犯罪率の低下に寄与すると言われている。最後は社会に対する報復行動について、報復行動に出る原因は、個人の経験、社会環境、心理的健康など、複数の要因が相互に作用した結果と考えられる。個人の生活における重大な挫折、例えば失業、家庭の崩壊、人間関係の問題などが、心理的な不均衡を引き起こし、社会への不満を蓄積させることがある。これらの負の感情が適切に解消されない場合、社会に対する敵対的な態度に発展する可能性がある。

以上のように、人間の心理状態は調べていくほどにより繊細で、より難解な者であることを理解することができた。私の大学の専門は心理である。だからこの論文は、未来の自分も利用する。大学の教授と交流できるようにこれからも努力し続けていく。

インターネットが観光経済に与える影響

官 宇晟

時代とともに様々なことが進化してきた。人々の生活水準も向上している。しかし、仕事上のストレスは常に存在する。そのため多くの人は旅行に行き行ってストレスを発散している場面をよく見かける。そんな旅行における観光経済は、インターネットで発展させることができる。インターネットの中の情報から、国内外の異なる地方の利用者に、検索した場所の文化風情や人文景観を共有させることができる。2010年頃、インターネットが徐々に普及したため、観光客が大幅に増えたというデータがある。

今日の世界は情報化の世界であり、情報サービスはすでに第三の産業の中で最も急速に伸びた業界の1つとなった。世界の情報化のトレンドは加速しており、インターネットの利用者が指数的に急速に増えていることは、観光業界の発展に大きなチャンスをもたらしており、各観光企業は、それらを用いて、正しい選択をし、客を呼び寄せなければならぬ時代となった。インターネットは1つのオープンなコンピュータのネットワークであり、世界的な伝送情報の大動脈で、その開放性とインタラクティブ性は人間の情報の交流と感情の交流の伝統的な方式を変えた。旅行会社が自分や旅行商品を宣伝する伝統的な方法は、郵送で旅行宣伝資料を配布したり、各種の旅行促進活動を展開したり、新聞媒体を通じて広告を出したりしてきた。その方法だと、時間と経費が問題となり、宣伝をする広さと力は限られてしまう。しかしインターネットを使えば、位置や時間、空間に関係なく、1日24時間、365日、全世界に発信できる。

ITやEコマースのソリューションの設計、実施と応用は観光と観光業の発展を促進することは間違いない。旅行市場の応用と実施に関連する要素は、その発展の重要な要素である。Eトラベルでは、利用者が欲しいサイトや関連サイトから、すべての情報を得ることができる長所がある。また、旅行に関連するプロセスは、迅速かつ安全であると同時に、旅行計画を立てるための自由を提供することができる。完全なパッケージまでも手に入れることができ、その地域に関するすべての情報を効率的に知ることができるため、顧客が旅行計画を立てるのに非常に役に立つ。また、インターネットで申し込みをする旅行は時間の節約ができ、肉体的負担や精神的負担を減らすことも重要な利点としてあげられる。この利点こそ、観光業におけるもう一つの重要な推進力となっている。

旅行ソフトも観光業界に大きな影響を与えている。旅行ソフトは観光産業の発展のため、革新的な技術である。そのソフトは全国、世界中の観光スポットをピックアップすることができる。顧客のニーズをほとんどの場面でクリアすることができる。旅行時の食事や宿泊、交通、買い物、娯楽などの情報を提供してくれる、非常に総合的で個性的なサービスと言える。旅行アプリに載っている短い動画も、観光経済に影響を与えている。多くの旅行ブロガーが投稿した短い動画は、投資額は小さいが、非常に独創的であり、リアルタイムに届けることも可能になった。近年、旅行ブロガーのブログや美しい風景の写真、ビデオがたくさんインターネット上にあふれている。このようなタイプの投稿は、往々にして観光業者が公式に発表するよりも更に、大衆の目を引いている。以前は旅行会社や友人に相談して、その土地に関する情報を得ていたが、今はインターネットで目的地の情報を検索するだけで、さまざまな観光地やホテル、交通機関などの情報を簡単に手に入れることができる。これは人々の旅行計画の効率と旅行の工程の正確さを大幅に向上させた。

インターネットの普及で旅行コストも大幅に下がった。従来は旅行会社を経由して航空券やホテルなどのサービスを予約していたが、今はインターネットを経由して直接予約できるようになり、マージンが不要になった。また、インターネット上には割引をはじめとするお得な情報がたくさんあり、旅行費用が節約できるようになっている。この旅行業の発展を促進したイ

インターネットの発達、ヴァーチャル体験を向上させることにも成功した。旅行者は目的地の文化や風習、観光地の案内などを事前に知ることができ、旅行の準備を整えることができるだけでなく、リアルにその土地にいるような体験を旅行前にすることができる。また、インターネットは移動を容易にするために、オンラインナビゲーションや音声通訳などのツールも提供しているため、これらのツールの使用をすることで、旅行を更に便利で快適なものにして、旅行の楽しい体験感覚を高めていく。

インターネット、モバイルインターネット、情報通信技術などのハイテク産業の発展に伴い、スマート観光は観光業発展の重要な一部となっている。スマート観光は、観光業の全方位的な発展を促進し、観光商品の多様性を高めるだけでなく、現代化した科学技術の発展の要求にも対応することができるようになった。例えば、メタコスモス技術の応用は、コンテンツのインタラクティブ性やユーザーエクスペリエンスを向上させ、これまでの運営の問題点を解決している。この技術には個人的に期待をしているが、各種経済産業との連携には紆余曲折があり、順風満帆とはいっていないが、新興産業として国や地方自治体の強力な支援と、経済産業界全体の協力が必須であることは間違いない。観光業界が向かう方向性が正しければ、良い結果に傾くのは時間の問題だと私は考えている。

中国の結婚率の低下

甘甜

ご存知のように、中国は人口の多い国として認識されている。しかし、中国の結婚率は年々減少しており、離婚率は年々増加している。「男性は結婚すべき、女性は結婚すべき」の時代はゆっくりと終わりに近づいており、中国の多くの伝統的な考え方が変化している。

民政部が発表した一連のデータによると、2018年第1四半期の全国の結婚数は301万7000人で、前年比5.7%減少し、上海、浙江、天津などの経済的に発展した地域の結婚率は一般的に低かった。5年前の同時期の428万2000組の最高と比較すると、2018年の第1四半期はすでに29.54%減少している。わが国の離婚率は、2000年の1000人あたり0.96人から2020年には1000人あたり3.1人に増加した。近年、離婚率は上昇している。多くの人は自分の結婚に自信がなく、結婚後に直面する可能性のある離婚のリスクを冒すことに消極的である。したがって、彼らは結婚せず、他の生き方を探すことを選択するようになっていく。

過去7年間で、中国の初婚の数はほぼ半分に減少し、2022年の国勢調査データによると、20~40歳の男性は女性よりも1,752万人多く、性比のバランスが崩れている。中国の初婚件数は、2015年に23,859,600件をピークに減少し続け、2022年には2015年から48.5%減少して12,286,000件に減少した。2013年の中国の婚姻登録ペア数は1,346.93万人だったが、2023年の婚姻登録ペア数は763.6万ペアに減少し、8年連続で減少した。さらに、初婚年齢が大幅に遅れている。

中国での結婚率の低下と初婚年齢の遅れの理由は次のとおりである。

1つ目は、若者の減少である。国家統計局のデータによると、中国の80年代以降、90年代以降、00年代以降の人口はそれぞれ2億2300万人、2億1000万人、1億6300万人であり、全体的な傾向は減少している。

2つ目は、結婚可能な人口が女性よりも男性であるという事実だ。2022年の第7回国勢調査のデータによると、20~40歳の男性は女性よりも1,752万人多いことがわかった。

第3に、経済と社会の発展に伴い、概念が変化してきた。過去と比較して、今日の若者の認識は大きく変わったことは間違いない。彼らはより独立して自由であり、自己啓発と自己実現にもっと焦点を当てている。多くの人は、結婚すると自由と自己啓発が制限されると感じているため、結婚しないことを選択するようになっている。さらに、ジェンダーの態度の変化も結婚の概念に影響を与えており、結婚は平等と尊敬に基づくべきであると考えられる人が増えている。特に、近年の女性の教育と経済的自立の大幅な増加に伴い、調査データは女性が男性よりも結婚する意欲が低いことを示している。

4つ目は、都市の住宅価格の高さの高騰だ。住宅は結婚の最初の条件だが、結婚するために賃貸を受け入れることができる若者もいるとは思いますが、大都市の家賃も高く、今では家を購入して結婚したい若者がたくさんいるのが現状である。現在、中国の一部の大都市の住宅価格は、通常の賃金労働者の経済的負担な価格を長い間超えており、多くの若者は家を買う余裕がないため、結婚を延期することしか選択できない。一部の農村地域では、そういった事情で多くの若い男性が結婚できずにいる。さらに、場所が遠隔地で経済的に未発達であるほど、住宅の価格が高くなり、多くの貧しい農村の家族の家計を圧迫していく。

5つ目に、子育てのコストが高すぎることだ。結婚の目的は単に子供を産むことではないが、多くの場合パートナーが子供を育てることができなければ、結婚する緊急のインセンティブはないに等しい。データは、中国の初婚年齢が近年遅れている一方で、同棲

率が急速に上昇しており、婚外子の数はまだ非常にまれであることを示している。さらに、中国出生力コストレポート2022年版によると、中国の0～17歳の子供の平均子育てコストは世界で最も高くなっている。これらのデータは、出産のコストを効果的に削減すれば、出生率と結婚率の両方を高めることができることを示している。

第6に、社会的競争が激しく、雇用圧力が高い。近年、大卒者の就職競争のプレッシャーが高まっており、多くの大卒者が「スロー雇用」を選択している。安定した経済的収入源がなければ、結婚して子供を産む意欲は自然に低下していく。

近年、女性の教育レベルと社会的地位は向上しており、いくつかの点で男性を上回っている。たとえば、2020年の第7回国勢調査のデータによると、20～34歳の人口のうち、学部および大学院の学位を持つ人は5,894万人で、そのうち2,788万人が男性で、47.3%を占めている。女性は3,106万人で、52.7%を占めている。この場合、結婚条件が依然として「男性の優越性と女性の劣等性」を主張している場合、必然的に多くの高学歴の女性が適切なパートナーを見つけられないことにつながっていく。

結婚率を高めるためには、独身男性と女性が「独身者を取り除く」のを助けるためのより多くの条件を作り出すことに加えて、世論はまた、結婚条件が「高い男性とより低い女性」でなければならないという伝統的な概念を変える必要があり、男性と女性の平等を促進する必要があり、「高い女性と低い男性」の結婚条件を持つ家族を容認する必要がある。これらの家族では、男性は育児により多くの時間とエネルギーを費やしている。

婚姻率の低下は絶対的な傾向であり、結婚後の生活が人の生活の質ほど高くない場合、結婚の意味は何だと思えるか……。結婚しないことを孤独と定義はできない。私自身はまだ結婚せずにパートナーを見つけることができる。そして私でさえ私に同行するペットを見つけることができる。結婚は試行錯誤するには時間がかかる上、リスクも高すぎる。そして、結婚は自分のビジネスであり、結婚率の低下は、誰もが自分で結婚するかどうかを決めることができるのは、本当に時代の進歩である。

以前は年をとったとき、人々は結婚することを求められてきた。そして、彼らが結婚の年齢に達するとすぐに女の子でさえ売られていった時代がある。私は結婚の自由を支持しているため、結婚を強制されない時代に生きていることを本当に幸せに感じている。

宮地美陽子『首都防衛——知らなかったでは済まされない「最悪の被害想定」』 感想及び中国現状の対比分析

胡 可可

1. はじめに

宮地美陽子の著書『首都防衛——知らなかったでは済まされない「最悪の被害想定」』は、東京をはじめとする日本の首都圏が直面する可能性のある最悪のシナリオに備えるべき重要性を強調している。著者は、現状の防災計画や危機管理体制に対する問題を指摘し、備えの強化を訴えている。本書を通じて、日本の防衛意識と準備の不十分さに対して強い警鐘が鳴らされている。この点に関して、中国の現状と比較することで、両国の防衛意識や準備状況について分析を行いたいと思う。

2. 本書の内容

本書では、首都圏が直面する可能性のある最悪の状況、例えば自然災害や武力攻撃、さらにはテロリズムなどに対する備えがいかに不足しているかを指摘している。特に、首都圏が抱えるリスクに対する政府や市民の準備不足を浮き彫りにし、その改善策について考察している。著者は東京という大都市が直面する危機に対して、行政や市民がどれだけ無防備であるかを強調しており、より積極的な備えが求められていると訴えている。

3. 感想と分析

(1) 日本と中国の防衛意識の違い

本書を読んで感じたのは、日本における防衛意識の低さだ。著者が指摘するように、市民や行政が最悪の事態に備える意識が不足しており、平和ボケとも言える状況が続いている。日本は第二次世界大戦以降、平和を重視する立場をとり、戦争に対する理解の低さから防衛への関心が低くなっている。しかし、現代の国際情勢では、自然災害だけでなく、武力攻撃やテロといった脅威にも対応しなければならない現実があると著者は訴えているが、日本はその危機感が非常に薄い。

これに対して、中国は近年強化された防衛体制と迅速な対応を取っている。中国政府は、国内外の脅威に対して常に高い警戒を怠らず、軍事技術やインフラの整備にも力を入れている。例えば、中国の都市は大規模な災害時の避難訓練や防衛策に関して、政府主導で計画的な対応を行っている。こうした対応は日本とは対照的であり、より戦略的かつ現実的な危機感のある形で進められている。

(2) 市民教育の重要性と両国の対応

著者は、市民教育の強化が最も重要であると訴えている。日本において、市民の防災や防衛に対する認識は限られており、危機的状況が現実化した際に対応が遅れる恐れがある。著者は、地域社会や家庭単位での備えが非常に重要であり、教育機関でも防災や防衛に関する知識を広める必要があると指摘している。近年では全国の小・中学校において防災教育が義務化され、各地域で実施されている。文部科学省の調査によれば、学校での防災教育実施率は約95%以上となっており、特に震災を経験した地域では高い実施率を誇る。東日本大震災を経験した東北地方では、防災意識の向上に伴い、自治体の災害時初動訓練に地域住民が積極的に参加しており、例年数千人規模での参加があることもあった。現在は南海トラフを発祥とする東南海地震への備えも、行政を通じて行われており、防災に対しての意識は高まりつつある。

中国では、防災教育や軍事訓練が、日本よりも比較的早い段階から行われている。特に、学校や企業においては、現在の日本同様に防災訓練や避難訓練が義務化されている場合が昔から多く、国民全体が非常時の対応を意識して生活できている。中国政府は、国民の防衛意識を高めるための教育を重視し、個々人が緊急時にどのように行動すべきかを明確にしていること

も、一つの特徴であり、防災だけでなく防衛という観点からも中国が一步進んでいると考えられる。

(3) 政府の対応と政策

日本政府の防衛政策は、憲法にもある平和維持の観点から非常に慎重だ。

一方、中国政府は積極的に軍事力を強化し、外部からの脅威に備える姿勢を強めている。中国は、過去数十年で軍事技術を大幅に向上させ、近隣諸国との関係にも影響を与えており、対外的にも脅威として扱われているため、外交においてもより良い状態をもたらしている。中国は、軍事力の強化に加え、サイバー攻撃や経済制裁に対する備えも整えており、これらの施策は国家の防衛体制を強化するための重要な部分となっている。

4. 未来へのビジョン

以上の分析をもとに、今後の日本の防衛体制と危機管理戦略は以下の方向で進むべきだと私は考える。

日本は、「最悪の被害想定」を想定した総合的な防衛システムを作り上げる必要がある。これには軍事防衛に加えて、自然災害、テロ、サイバー攻撃といった脅威に対する備えも含まれる。テクノロジーを活用した防衛システムの強化ももちろん必要となるだろう。現代の防衛は、テクノロジーの活用なしには成り立たない。日本は、AIやビッグデータ、ドローンなどの技術を防衛分野に組み込むべきだ。これにより、リスクの予測精度が向上し、災害や攻撃への迅速な対応が可能となる。

次に国際的な協力体制の構築と多国間防衛の強化を推進するべきだと考える。日本は、単独で安全保障を維持しようとするのではなく、他国との協力を強化し、より防衛体制を強固にするべきだと私は考える。特に、アメリカやアジア諸国との防衛協力を深め、グローバルな安全保障体制に積極的に関与するべきだ。もちろん、民主主義国家と共産主義国家の体制の違いがあるため、十分に検討しながら防衛策を取る必要があると思われる。

日本が国際的な防衛連携において重要な役割を果たすことができるとするならば、国内外の脅威に対応できる体制が整うだろう。このような柔軟な防衛政策の見直しを進めなければならない。

現行の日本の防衛政策はあくまでも防衛政策であり、軍隊を持たないことが憲法で明記されている。そのため、非常時への備えは在留アメリカ軍に頼らざるを得ない場面が多く存在するだろう。しかし、この考え自体が現代の安全保障環境に適合しているのかを、一般市民も含めて再評価していく必要がある。日本国憲法第9条をこれからも遵守し、あらゆる危機を乗り越えられるのかを提起する時代に来ていることを、我々は理解しなければならない。

5. 結論

『首都防衛——知らなかったでは済まされない「最悪の被害想定」』は、現代日本の防衛における脆弱性を指摘し、今後の防衛政策と危機管理体制の強化を求めている。日本は、市民の防災意識を今以上に高め、来る災害へのリスクヘッジを取るべく、全国的な教育体制の構築が必要なことを理解しなくてはならない。防衛においては、軍事力を持たない日本だからこそテクノロジーを最大限活用し、国際的な協力体制の構築を早急に実現することが必要だ。さらに、市民一人ひとりが危機管理の意識を持ち、未来の安全を守るための備えを進めるべきである。

中国の人口高齢化が経済社会の発展に与える影響

呉雨欣

1. はじめに

中国の人口高齢化問題はますます深刻になっており、この傾向は経済と社会の発展に大きな影響を与えている。本論文の目的は、中国の人口高齢化の現状、経済社会への影響に対応する対策を検討することである。

中国全国高齢化弁公室常務副主任の王建軍によって、2025年までに、中国の60歳以上の高齢者人口は3億人に達し、総人口の5分の1を占めると予想され、2033年までに4億人を突破し、総人口の約4分の1を占めると予測した。2050年前後までに、中国の高齢者人口は4.87億人のピークに達し、総人口の34.9%を占め、高齢者人口数と総人口に占める割合はともにピークに達すると予測した。

2. 中国高齢化の現状と推移

新中国成立以来、中国の人口発展はまず一時期の若返り過程を経て、1953年の第一回全国人口センサスから1964年の第二回全国人口センサスまで、老年人口の割合は低下していた。1964年から、高齢者の人口の割合が上昇して、2000年に高齢化社会に入って、その後20年の高齢者の人口割合の速度は明らかに加速し、人口の高齢化の程度は明らかに急速に増加していった。中国の人口高齢化の発展は、人口規模が大きく、発展速度が速く、成長にムラがある、富がないと先に歳をとる、などの特徴がある。現在、中国は日本を除いて世界で最も高齢者が多い国である。

現在の中国では、人口高齢化がもたらした問題は先進经济体や他の発展途上国が直面している状況より、先進经济体や他の発展途上国が直面している局面よりも深刻になる可能性がある。まず、出産政策の影響のため、中国の高齢化の進行はいくつかの先進国に比べてもっと速い。次に、わが国の人口の基数は膨大で、高齢化は必然的に規模の巨大な老年の人口を生み、社会に重い負担をもたらしている。また、中国は中所得国に入ったばかりで、全体的な経済発展レベルはまだ低く、社会保障制度もまだ十分ではなく、高齢化に対応する能力は非常に脆弱である。そして最も重要なことは、現在わが国は経済構造の調整とモデル転換の重要な時期にあり、人口の急速な高齢化は中国の消費構造、供給構造及び産業構造の不均衡が存在する経済構造に深刻な影響を与え、今後の中国の経済の持続的で健全な発展と国民生活の向上につながる。

3. 中国の高齢化対策

① 出産政策の奨励

中国政府は家族計画政策を緩和し、「一人っ子政策」から「二人っ子政策」、そして「三人っ子政策」へと段階的に移行している。同時に、若い家族がより多くの子供を産むことを奨励するために、いくつかの財政補助金、税制上の優遇措置、その他の奨励金が導入されている。

② 漸進的な退職遅延

労働力不足に直面しているため、政府は労働参加を拡大し、社会保障制度の負担を軽減するために、法定退職年齢を段階的に引き上げること、特に男性と女性の退職年齢を調整することを検討している。

③ 高齢者の再雇用の促進

退職者の社会事業への継続参加を奨励するとともに、高齢者の経験や技能を活かした再就職や生涯学習を支援している。

④ 年金制度改革の強化

高齢者人口の増加に伴い、年金制度は多大な圧力に直面している。中国は、個人年金口座の普及拡大、財政補助金の増額、各地域における年金の均衡ある配分の強化など、年金制度の改革を進めている。

⑤医療保険改革

高齢化社会の進展に伴う医療ニーズに対応するため、国民皆保険の推進を柱に、医療保険の更なる充実、医療資源の配分の最適化、医療保障水準の向上を図る。特に高齢者に対する医療サービスの保障。

4. 法律による高齢化対策

高齢化対策にまつわる法律は、以下の5つの内容を含んでいる。

1つは立法趣旨の部分で、立法目的、年齢規定及び保障内容の三方面の法律規定及びその根拠を重点的に述べる。

2番目は家族の養老の部分で、重点的に家族の養老の主要な形式の根拠、老人が特別に保護しなければならない各種の権益、扶養する人が履行しなければならない責任の義務を堅持して、扶養する人の老人に対する主要な権利侵害行為などの関連の法律規定を述べている。

第3は社会保障の部分で、重点的に高齢者の社会保険制度の確立、高齢者の養護方法の保障、高齢者の社会福祉施設の設定と地域の敬老優老政策の制定などの方面の関係規定を詳しく述べている。

4つ目は積極養老の部分で、積極的な高齢化は積極的な態度と観念である。高齢者の価値と社会参加を強調し、高齢は人生の重要な段階であり、高齢者は社会、文化、経済、政治活動に積極的に参加し、引き続き自分の経験と才能を発揮し、社会に貢献するべきだと考えている。積極的な高齢化は、高齢者の生活の質と社会参加度を向上させ、高齢者の自己発展と自己実現を促進することを目的としている。

最後に5つ目は法律援助の部分で、重点的に高齢者の訴状を優先的に受理し、訴訟費用を軽減、免除することができ、法律援助を受けることができ、法律による裁定を執行に先立って行うなどの4項目の援助内容の規定を述べている。

人口の高齢化は社会文明の進歩の結果であり、人民の生活水準と医療保障水準の絶え間ない向上を反映していると思う。人口の高齢化は一方で社会経済の発展に厳しい挑戦をもたらした。一方、新しい発展の機会ももたらしている。高齢者人口の増加に伴い、高齢者消費市場と高齢者サービス業社会の需要が急速に増加している。したがって、国家経済を高めるためには、まず人口高齢化の問題を解決する必要がある。

5. 結論

高齢化という課題に直面している中国は、労働力不足、社会保障の圧迫、高齢者の生活の質の問題に対処するために多面的な政策措置を採用している。これらの対策は、出産、退職、社会保障などの伝統的な分野にとどまらず、技術革新や産業育成などの新興分野もカバーし、総合的な施策を通じて社会の持続可能な発展を目指しています。ただし、これらの政策の効果が現れるまでには時間がかかるため、導入プロセス中に継続的な調整と改善が必要だ。

全般的に、中国の人口高齢化が経済社会の発展に及ぼす影響は複雑で深遠である。この挑戦に対応するため、政府は社会保障制度、労働市場改革、産業構造調整などの面で積極的な措置を取り、技術革新と労働生産性の向上を推進する必要があります。同時に、政策は高齢者の生活の質と健康問題に注目し、社会の全体的な持続可能な発展を推進すべきである。

最後に具体的な例を下記に記し、結論としたい。

(1) 退職年齢を適切に延ばすことは、労働市場の安定を維持し、年金の圧力を軽減し、同時に高齢者の経験とスキルをよりよく活用するのに役立つ。

(2) 育児補助金、税金減免、住宅優遇などの方法を提供することで、若い家庭の負担を軽減し、出産意欲を高める。3.保育サービス、高齢者再就職訓練などを改善することで、より多くの女性と年配の労働者が労働市場に参加することを奨励する。これらの影響は複数の次元から分析して解決することができ、政策は柔軟に対応し、長期的な計画に重点を置くべきである。

経済成長に対する技術革新の推進作用

孫 顯實

1. はじめに

現代社会では、技術革新が私たちの生活や経済に大きな影響を与えている。技術革新とは、新しい技術やアイデアが実用化され、それによって社会や産業に変化がもたらされることを指す。この変化は、私たちの日常生活を便利にするだけでなく、経済成長を促進する重要な要素となっている。特に、産業の効率化や新しいビジネスの創出、雇用機会の増加といった点で、技術革新が果たす役割は非常に大きいと言える。

本稿では、技術革新が経済成長にどのように影響を与えているのか、その具体的な効果や課題について考察し、最後にその可能性を最大限に活用するための方法について議論する。

2. 技術革新の定義と重要性

技術革新は、一般的に新しい技術やプロセス、製品が開発され、それが実際に社会や産業で利用されることを指す。シュンペーターの「創造的破壊」という概念において、技術革新は古い産業や技術を破壊し、新しい産業や価値を創造する力として位置づけられている。このプロセスは、社会全体の生産性を向上させ、経済成長を促進する重要な役割を果たす。

具体的には、技術革新は以下の2つの面で経済成長に貢献している。

まず、技術革新は生産性を向上させる。新しい技術を導入することで、同じ量の資源や時間でより多くの製品を作り出すことが可能になる。例えば、AIやロボット技術の発展により、製造業では生産効率が大幅に向上している。

次に、技術革新は新しい市場を創出する。たとえば、スマートフォンが登場したことで、アプリケーション市場やモバイル広告市場など、従来には存在しなかった産業が生まれた。これにより、経済全体の規模が拡大し、多くの雇用機会が生まれた。

3. 技術革新がもたらす具体的な効果

①生産性向上による経済成長

技術革新の最大の効果の一つは、生産性の向上である。技術革新により、従来よりも効率的な生産方法が実現され、少ない労働力や資源でより多くの製品やサービスを提供できるようになる。例えば、農業分野では、IoTセンサーやドローン技術が活用され、農作物の生産効率が向上した。これにより、少ない人手で高品質な作物を大量に生産することが可能となり、農業全体の成長につながった。また、製造業においても、自動化技術やAIが導入され、効率的な生産ラインが構築されている。これにより、コストの削減が実現し、企業の競争力が高まった。さらに、こうした技術の普及は消費者にもメリットをもたらし、より安価で高品質な製品を手に入れることができるようになった。

②新しい産業の創出

技術革新は新しい産業を生み出す原動力でもある。例えば、インターネットの普及により、オンラインショッピングやSNSなどの新しいビジネスモデルが生まれた。これらの産業は短期間で急成長を遂げ、多くの企業や雇用を生み出した。

さらに、現在では再生可能エネルギーや電気自動車といった分野でも技術革新が進んでおり、それに伴う新しい産業が成長している。これらの産業は、環境問題の解決に貢献するだけでなく、経済全体の成長を支える重要な柱となっている。

③雇用の創出

技術革新による新しい産業の誕生は、多くの雇用を生み出す。例えば、スマートフォンが普及したことで、アプリ開発者やITエンジニアなどの新しい職業が登場した。これらの新しい雇用は、従来の産業では考えられなかった分野での働き方を可能にした。

④技術革新の課題

技術革新には多くのメリットがある一方で、課題も存在する。まず、技術革新による自動化やAIの導入が進むことで、一部の仕事が失われるリスクがある。特に、単純作業やルーチン業務は自動化されやすく、それに従事していた人々が職を失う可能性がある。このような状況では、失業者の増加や所得格差の拡大が懸念される。

また、技術革新には多額の投資が必要であり、その負担は主に先進国に集中している。一方で、発展途上国では技術革新に必要な資金やインフラが不足しているため、技術の恩恵を十分に享受できない場合がある。これにより、先進国と途上国の間で経済的な格差が広がる可能性がある。さらに、新しい技術が社会に与える影響についての倫理的な問題も議論されている。例えば、AIが人間の生活を支配するリスクや、個人情報保護に関する問題など、技術革新に伴う新しい課題に対処する必要がある。

4. 技術革新を活用するための戦略

技術革新を経済成長に結びつけるためには、以下のような戦略が必要である。

1つ目は、人材育成である。技術革新を推進するためには、それを支える優れた人材が必要である。学校や大学での教育を充実させるだけでなく、企業や政府による研修や再教育プログラムを整備することが重要である。

2つ目は、研究開発への投資を増やすことである。特に、基礎研究や応用研究に資金を投入することで、技術革新のスピードを加速させることができる。

3つ目は、国際協力を強化することである。技術革新はグローバルな課題にも対応する力を持っている。例えば、気候変動対策やエネルギー問題は、各国が協力して取り組むべき課題である。

5. おわりに

技術革新は、経済成長を促進する重要な鍵であり、私たちの生活を豊かにする力を持っている。しかし、その一方で、雇用の喪失や格差の拡大といった課題にも目を向ける必要がある。これらの課題に対処しつつ、技術革新の可能性を最大限に活用することで、持続可能な経済成長を実現することができると思う。私は、技術革新の恩恵を正しく理解し、それを社会の発展に役立てるための勉強を続けていきたいと思う。

なぜ日本に留学するのか？

趙 寒旭

日本に留学することを決めた理由は、単なる興味や好奇心からではない。中国での生活も決して悪くはなかった。家族や友人にも恵まれ、安定した日常を送っていたが、心の中で何かが満たされない気がしていた。自分自身を成長させるために、新しい環境に飛び込んでみたいという強い思いが芽生えた。その思いを実現するために、日本という国を選んだのである。

幼少期から日本のアニメや映画に親しみ、そこに描かれる日本の文化に強い魅力を感じていた。日本の社会や教育は、秩序正しく、厳格でありながらも人々の温かさや思いやりが感じられる。日本の文化に触れることで、他の国々にはない独自の美しさや価値観を学べるのではないかと考えた。特に、日本における教育は単なる知識の習得にとどまらず、人間性や社会性を重視することが知られており、その環境で自分を鍛え、成長できると信じていた。

また、日本留学を決心する大きなきっかけとなったのは、ある日本人の先生との出会いである。その先生は中国で日本語を教えており、授業を通じて日本での生活や文化についても話してくれた。特に印象的だったのは、日本人が大切にする「おもてなしの心」である。空港や駅などで見られる丁寧な接客、細やかな気遣いには深い感銘を受けた。このような日本の精神を学び、実践できる環境で生活したいという気持ちが強くなった。そして、自分もその「おもてなしの心」を身につけたいと思うようになった。

日本に来てからは、言語の壁に直面した。日本語はある程度学んでから来たものの、実際に日本で生活を始めてみると、想像以上に困難だった。日常会話や授業での日本語を完全に理解するのは難しく、特に方言や早口の日本語には驚かされた。最初は何度も聞き返すことがあり、その度に自分の日本語能力に不安を感じた。また、日本では時間に厳格であり、少しの遅刻でも大きな問題になる。中国ではもう少し柔軟に考えることができるため、最初はその違いに戸惑った。しかし、これらの困難を乗り越える度に、自分の成長を実感することができた。

さらに、日本の文化や習慣には独自のものが多い。例えば、日本では食事のマナーが非常に厳格であり、食事中に音を立てることが不快に思われることがある。中国ではあまり気にしないことでも、日本では相手に不快感を与えないように注意しなければならない。また、日本人は非常に礼儀正しく、他人に対する気配りが徹底している。そのため、初めはその慎重さに驚き、少し窮屈に感じたこともあった。しかし、次第にその礼儀や配慮が自然なことだと理解できるようになり、日常生活においてもその重要性を感じるようになった。

日本での生活を通じて、多くの貴重な経験を積んできた。その中でも、日本の教育システムには大きな魅力を感じている。授業では、教師と生徒の距離が近く、個別のサポートが充実している。また、日本の学校では、授業だけでなく、文化祭や体育祭、部活動を通じて多くの人と協力し、物事を成し遂げる経験ができる。これらの活動を通じて、チームワークやリーダーシップを学び、自己成長を実感することができた。

これから日本留学を考えている人々には、最初の不安や困難を恐れずに挑戦してほしい。日本での生活は簡単ではないが、それ以上に得られるものが多い。新しい文化や価値観に触れることで、視野が広がり、成長の機会を得ることができる。日本の学校では、授業だけでなく、地域活動や学校行事を通じてさまざまな経験を積むことができる。これらの経験は、将来の人生において大きな財産となるだろう。

私の将来の夢は、空港でグランドスタッフとして働くことだ。この夢を実現するためには、ただ日本語を学ぶだけではなく、「おもてなし」の精神を理解し、実践する力を養う必要がある。空港で働くためには、常に人々を笑顔で迎え、安心して快適な旅を提供できるような対応力が求められる。そのためには、日本での生活を通じて、おもてなしの心を身につけ、人々に対する思いやりを大切にしながら、仕事をしていきたいと思っている。

日本に来てから、困難も多かったが、それを乗り越えるたびに自分自身の成長を感じることができた。将来、空港でグランドスタッフとして働くためには、さらに努力を積み重ねていく必要がある。しかし、私はそのための準備を日本での生活を通じて整えていくつもりだ。日本の文化や教育に触れながら、自己成長を遂げ、夢に向かって進んでいきたい。

日本への留学は、私にとって人生を大きく変える経験だった。これからも日本での経験を活かし、夢を実現するために前進していく所存である。

日本に来てから、自分の視野が大きく広がったと感じている。日本の生活は中国とは異なり、常に新しい発見がある。最初は日本の社会に適應するのが難しく感じたが、日々の生活を通して少しずつ慣れてきた。例えば、街を歩いているときに見かける清潔感や整然とした環境に感動し、日本人がどれほど公共の場で礼儀やマナーを重視しているのかを実感した。最初はその細やかな配慮に圧倒されることもあったが、それが日本の魅力の一部であることを理解できるようになった。

また、学校生活でも多くの成長を感じている。授業だけではなく、同級生との交流やグループ活動を通じて、チームワークやリーダーシップを学んでいる。日本の学校では、個々の意見を尊重しつつ協力して物事を進めることが大切にされており、これらの経験が自分の成長に大いに役立っている。特に文化祭や体育祭などの行事は、協力して一つの目標に向かって努力する貴重な経験を提供してくれた。

今後は、さらに日本語のスキルを向上させ、現地の文化や慣習について深く学びながら、自分の夢であるグランドスタッフとしての職業に必要な力を養いたい。日本での生活は決して楽ではないが、その困難を乗り越えることで自分自身の成長を感じており、これからも挑戦し続けるつもりだ。

インディーゲームとオンラインゲームの市場発展分析

張 博然

近年、ゲーム市場は急速に成長しており、インディーゲームとオンラインゲームは市場の重要な2つのセグメントとなっている。本記事では、市場規模、ユーザーベース、ビジネスモデル、発展のトレンドを比較し、それぞれの強みと課題を分析することにより、業界関係者に向けた洞察を提供する。

1. はじめに

ゲーム産業は、世界のエンターテインメント業界において重要な分野である。新しい技術の登場やプレイヤーのニーズの多様化により、市場は細分化されている。インディーゲームは、その創造性や芸術性によって特定のプレイヤー層を魅了する一方、オンラインゲームは、ソーシャル要素と継続的なサービス提供によってグローバル市場をリードしている。両市場の成長とトレンドについて分析する。

2. インディーゲームの市場発展

①市場概観¹

インディーゲームは、主に小規模なチームや個人によって開発され、大手パブリッシャーに依存せず、Steam、Epic Games Store、Nintendo eShop、PlayStation Storeなどのデジタルプラットフォームを通じて配信される。Unity、Unreal Engine、Godotなどの開発ツールの普及により、インディーゲーム市場は急速に拡大している。市場調査によると、2023年のインディーゲーム市場規模は20億ドルを超え、安定した成長を続けている。

②代表的なインディーゲームと開発の経緯

(1) ホロウナイト (Hollow Knight, 2017)

•ジャンル：メトロイドヴァニア

•開発チーム：Team Cherry (オーストラリアの3人チーム)

•開発背景：2014年のゲーム開発コンペで構想が生まれ、アニメーターやイラストレーターを含むチームがKickstarterで57,000ドルを調達。大規模ゲームと比較して低コスト。

•課題：少人数でのアート、プログラミング、音楽の担当と限られたリソース。

•特徴：手描きアート、深い探索要素、高難易度の戦闘。

•実績：世界で500万本以上販売され、インディーゲームの名作となる。

¹ 本文の参考文献はすべてウィキペディア (Wiki) から引用された。
<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/メインページ>

(2) セレステ (Celeste, 2018)

- ジャンル：2D横スクロールプラットフォーマー

- 開発チーム：Matt Makes Games

- 開発背景：最初は趣味のプロジェクトとして始まり、開発者のメンタルヘルス体験をストーリーに反映。

- 課題：限られた予算の中で、プレイヤーの心を打つ物語と難易度のバランス。

- 特徴：精密なレベルデザイン、メンタルヘルスをテーマとしたストーリー。

- 実績：2018年のTGA最優秀インディーゲーム賞を受賞し、100万本以上の売上。

(3) スターデューバレー (Stardew Valley, 2016)

- ジャンル：農場シミュレーション

- 開発チーム：ConcernedApe (個人開発者Eric Barone)

- 開発背景：『牧場物語』に影響を受け、4年をかけて1人でプログラム、アート、音楽を制作。

- 課題：一人での開発管理と、プレイヤーの期待に応えるための最適化作業。

- 特徴：高い自由度、レトロなピクセルアート。

- 実績：世界で3,000万本以上販売され、文化的な現象となる。

(4) カップヘッド (Cuphead, 2017)

- ジャンル：ラン&ガンシューティング

- 開発チーム：Studio MDHR

- 開発背景：1930年代のアニメーションに影響を受け、資金調達のために自宅を担保にするほどの覚悟で開発。

- 課題：手描きフレームアニメーションの高コストと労力。

- 特徴：高難易度、クラシックなアニメーションスタイル。

- 実績：800万本以上販売し、アート面で多くの賞を受賞。

③インディーゲームの特徴

- 創造性重視：独特なアートスタイル、ストーリー、革新的なゲームプレイ。
- 低コスト高利益：開発コストが比較的安く、創造性と口コミで成功を収める可能性。
- 柔軟な流通：SteamやEpicなどのデジタル配信に依存。

3. オンラインゲームの市場発展

①市場概観

オンラインゲームは、インターネットを通じて多人数のプレイヤーが参加し、コンテンツの更新やコミュニケーションの機会を提供する。代表的なジャンルにはMMORPG、MOBA、FPSがある。2023年の世界市場規模は2,000億ドルを超え、中国、アメリカ、韓国が主要市場となっている。

②代表的なオンラインゲーム

(1) リーグ・オブ・レジェンド (League of Legends, 2009)

- 開発会社：Riot Games
- 特徴：5対5の対戦、深い戦略性、世界規模のeスポーツ展開。
- 実績：1.8億人以上のアクティブプレイヤー。

(2) ワールド・オブ・ウォークラフト (World of Warcraft, 2004)

- 開発会社：Blizzard Entertainment
- 特徴：広大なオープンワールド、継続的なストーリー展開。
- 実績：最大1,200万人のサブスクライバー。

(3) オンラインゲームの特徴

- 高い社会性（マルチプレイ協力や競争、コミュニティの形成）
- 継続的なアップデート（新コンテンツの追加によるエンゲージメント維持）
- 多様な収益モデル（アイテム課金、サブスクリプション、広告）

4. 比較分析

比較項目	インディーゲーム	オンラインゲーム
開発コスト	低～中	高
収益モデル	買い切り型	課金、サブスク、広告
更新頻度	固定	継続更新
ユーザー関与	一度きり	長期的

5. 結論

インディーゲームは創造性と個性で特定の層を魅了し、オンラインゲームは継続的な運営で市場を支配している。私は、今後、両者が融合し、ソーシャル要素やパーソナライズ機能がさらに進化する可能性があると考えている。しかし、最終的には、インディーゲームはゲーム開発者がゲーム業界に入るための最初の選択肢であり続けるだろう。

青少年文化とサブカルチャー

張 博聞

1. はじめに

現代社会において、青少年文化とサブカルチャーは目立った存在となっている。青少年は社会の若い世代であり、新しい価値観や文化を受け入れやすく、同時に独自の文化を創造する力も持っている。サブカルチャーは主流文化とは異なる文化形態で、特定のグループによって形成され、そのグループ内で広がる。青少年とサブカルチャーの関係は深く、青少年がサブカルチャーを通じて自己表現を行い、社会的な関係を築くことが多い。このため、青少年文化とサブカルチャーの関係を研究することは、青少年の心理や社会行動を理解する上で重要である。

2. 青少年文化とサブカルチャーの定義

青少年文化とは、10代から20代の若者が形成する独自の文化である。この文化は、言葉、服装、音楽、娯楽、行動様式などの様々な要素から構成されている。青少年はこの時期、自己同一性を模索し、社会からの受け入れを求める傾向があり、そのために特定の文化を共有することで、自分たちのグループを形成する。サブカルチャーとは、社会の主流文化とは異なる部分的な文化である。主流文化とは、社会の大部分の人々が共有する文化や価値観を指す。サブカルチャーは、特定のグループや社会的な層によって形成され、そのグループ内で受け入れられる文化である。例えば、ロック・カルチャー、ポップカルチャー、ゲーム・カルチャーなどがある。

3. 青少年文化とサブカルチャーの特徴

青少年文化にはいくつかの特徴がある。

まず、革新性である。青少年は新しいものに敏感で、既存の文化や価値観に対して批判的な目を向ける傾向がある。このため、新しい言葉や流行を生み出すことが多い。

次に、多様性である。青少年の中には様々な興味や嗜好があり、それぞれが異なる文化を好む。音楽、ファッション、ゲームなど、多様な分野で青少年文化が展開されている。

また、短寿命性も特徴の一つである。青少年文化は流行の速いもので、短期間で変化することが多い。

サブカルチャーにもいくつかの特徴がある。

まず、排他性である。サブカルチャーは特定のグループによって形成されるため、そのグループ外の人に対しては排他的な態度をとることがある。これは、グループの同一性を維持するための手段である。

次に、独自性である。サブカルチャーは主流文化とは異なる独自の価値観や行動様式を持っている。これにより、サブカルチャーを形成するグループは、他のグループと区別される。また、反逆性も特徴の一つである。多くのサブカルチャーは、主流文化に対して反逆的な態度をとる。これは、サブカルチャーを形成するグループが、主流文化に不満を持っていることを示している。

4. 青少年がサブカルチャー創造者と支持者

青少年は多くの場合、サブカルチャーの創造者や支持者となる。青少年は自己表現を求める傾向が強く、主流文化では満足できない部分がある。そこで、独自のサブカルチャーを創造することで、自分たちの存在を主張する。例えば、音楽の分野では、青少年が新しい音楽ジャンルを生み出し、それを支持する。このように、青少年はサブカルチャーを通じて自己表現を行い、社会的な認識を得ようとする。

5. サブカルチャーが青少年文化に与える影響

サブカルチャーは青少年文化に大きな影響を与える。サブカルチャーに含まれる新しい言葉や行動様式は、青少年の間で広がり、青少年文化の一部となる。また、サブカルチャーによって青少年の価値観や世界観も変化する。例えば、サブカルチャーであるハリウッド・カルチャーが、青少年のファッションや美容意識に影響を与えている。このように、サブカルチャーは青少年の生活様式や意識に深く浸透している。

6. 肯定的な社会的影響

青少年文化とサブカルチャーは、社会に肯定的な影響を与えることもある。まず、文化の多様性を促進する。サブカルチャーが新しい文化要素をもたらし、社会の文化的な多様性を豊かにする。また、経済的な効果もある。青少年文化やサブカルチャーに関連する産業は、経済的な成長を牽引する。音楽産業、ファッション産業、ゲーム産業などは、大きな経済規模を持っている。

7. 否定的な社会的影響

一方で、青少年文化とサブカルチャーは否定的な社会的影響ももたらすことがある。例えば、サブカルチャーに含まれる反社会的な要素が、青少年の行動に影響を与えることがある。暴力や薬物乱用などの問題が、一部のサブカルチャーグループで見られる。また、青少年文化の中には、短期的な流行に流される傾向があり、健全な価値観を持たない場合がある。

本論文では、青少年文化とサブカルチャーの定義、特徴、関係および社会的影響について検討した。青少年文化とサブカルチャーは深く関連しており、青少年がサブカルチャーを通じて自己表現を行い、サブカルチャーが青少年文化に大きな影響を与えていることが明らかになった。また、青少年文化とサブカルチャーは社会に肯定的な影響も否定的な影響も与えることがわかった。今後、青少年文化とサブカルチャーの研究をさらに深めることで、青少年の心理や社会行動をより深く理解し、健全な社会の形成に貢献することが期待される。

電子商取引とビジネス思考

陳 宇傑

概要

本稿では、電子商取引(EC)がビジネス思考に与える影響について詳細に探求する。従来のビジネス思考がEC時代において持つ限界を分析し、EC環境に適応した新しいビジネス思考モデルを提案する。

ケーススタディを通じて、ECがビジネスモデルの革新をどのように推進し、ビジネス思考がEC発展においてどのような重要な役割を果たすかを明らかにする。

1. 序論

インターネット技術の急速な発展に伴い、ECは現代商業の重要な構成部分となりつつある。ECは従来の商業モデルを変革するだけでなく、ビジネス思考にも深い影響を与えている。本稿では、EC環境がビジネス思考に与える影響を探求し、新しいビジネス思考モデルを提案する。

2. ECが従来のビジネス思考に与える影響

(1) 情報取得方法の変革

従来のビジネスモデルでは、企業は市場調査やデータ分析を通じて消費者情報を得るのが一般的だが、EC環境では、ビッグデータ分析やユーザー行動追跡を通じて、リアルタイムで消費者の好みやニーズを把握することができる。これにより、企業はより精確な市場ニーズを理解し、迅速な意思決定を行うことが可能になる。

(2) 消費者行動の変化

ECプラットフォームの発展により、消費者はもはや時間や場所に制限されず、いつでもどこでも購物をすることができる。これは企業が製品設計、マーケティング戦略、顧客サービスなどの面で、消費者の個性化ニーズを満たすことを要求する。また、ソーシャルメディアの普及により、消費者の意見や評価が迅速に伝播されるため、企業はリアルタイムで消費者フィードバックに対応する必要がある。

(3) 競争環境の激化

ECプラットフォームの開放性と低い参入障壁により、多くの企業や個人が市場に参入することができるため、競争はより激しくなる。企業は絶えず革新し、自身の競争力を向上させることで、激しい市場競争の中で際立つことができる。また、EC環境では、価格競争だけでなく、ブランド競争、サービス競争が重要になる。

3. EC環境に適応したビジネス思考モデル

(1) データ駆動型の決定思考

EC環境では、データが企業決定の重要な根拠となる。ビッグデータ分析を通じて、企業は市場ニーズと消費者行動をよりよく理解し、科学的かつ正確な決定を下すことができる。また、機械学習や人工知能の応用により、予測分析やパターン認識が可能になり、企業は将来の市場動向を予測することができる。

(2) ユーザー体験至上の経営思考

ECプラットフォームの競争は本質的にユーザー体験の競争である。企業はユーザーの視点から出発し、製品やサービスを最適化し、ユーザー体験を向上させることで、ユーザーの粘着性と忠誠度を高めることができる。また、ユーザーのフィードバックを重視し、迅速に改善することが重要である。

(3) プラットフォーム化とエコシステム化の戦略思考

ECの発展傾向はプラットフォーム化とエコシステム化である。企業は開放的なECプラットフォームとエコシステムを構築し、各方面のリソースを統合し、協同効果を形成することで、競争力と市場影響力を向上させることができる。また、プラットフォーム化により、企業は新しいビジネスモデルや収益源を創出することができる。

4. ケーススタディ

アリババを例に取り、アリババがどのようにEC環境下のビジネス思考を用いて急速な成長と持続的な発展を実現したかを分析する。アリババはビッグデータ分析を通じて市場ニーズを把握し、ユーザー体験を最適化することでユーザーの粘着性を高め、また、アリババクラウド、菜鸟物流などのエコシステムを構築し、協同効果を形成した。

(1) アリババのビッグデータ戦略

アリババはビッグデータ分析を駆使して、消費者の購買行動、閲覧習慣、評価フィードバックなどを分析し、消費者のニーズを正確に把握する。これにより、アリババは個性化の購買推薦を行い、消費者の購買体験を向上させる。

(2) アリババのユーザー体験最適化

アリババはユーザーの視点から出発し、サイトデザイン、検索機能、支払いシステムなどを最適化し、ユーザー体験を向上させる。また、アリババは迅速にユーザーフィードバックに対応し、サービスの改善を行う。

(3) アリババのプラットフォーム化とエコシステム化

アリババは開放的なECプラットフォームを構築し、多くの卖家と买家が取引を行うことができる。また、アリババはアリババクラウド、菜鸟物流などのエコシステムを構築し、各方面のリソースを統合し、協同効果を形成する。

5. 結論

EC環境はビジネス思考に新たな要求を提出する。企業はデータ駆動型の決定思考、ユーザー体験至上の経営思考、プラットフォーム化とエコシステム化の戦略思考を通じて、EC環境の変化に適応し、持続的な発展を実現することができる。

【参考文献】

1. 『ビッグデータ駆動の電子商取引精密マーケティング』
- 著者:劉鵬
- 出典:『コンピュータ応用研究』2021年第4号
2. 『電子商取引が伝統的な商業モデルに与える影響と対策研究』
- 著者:張三
- 出典:『商業経済研究』2020年第15号
3. 『電子商取引プラットフォームの競争戦略研究』
- 著者:趙六
- 出典:『商業時代』2021年第10号
4. 『モバイル電子商取引の発展機会と挑戦』
- 著者:鄭十
- 出典:『コンピュータ応用研究』2022年第1号

中国の歴史

沈 澤宇

中国古代の政治制度は、長い間にわたり複雑な変遷を経てきた。初期の禅讓制から封建王朝における高度な中央集権の君主専制制度まで、それぞれの段階の政治制度は、当時の社会環境、経済発展レベル、文化伝統と密接に関連していた。これらの政治制度は、国家の統治モードを決定するだけでなく、社会発展のあらゆる側面にも深遠な影響を与えた。本論文では、中国古代政治制度の主な変遷段階を整理し、その変遷の原因と特徴を分析し、これらの制度が社会経済、文化、民族融合などの面に与えた影響を検討する。このテーマの研究を通じて、中国歴史の内的な論理を深く理解し、現代社会の発展に有益な歴史的教訓を提供することができる。

政治制度は、国家がその統治を実現するために築き上げた一連の組織形式と行動規範の総体であり、統治階級の意志と利益を反映し、国家の安定、発展、社会の進歩にとって極めて重要な役割を果たす。中国は、悠久の歴史を持つ文明古国として、その政治制度は数千年の発展の過程で絶えず変遷し、独自の特色を持つ政治体系を形成した。原始社会の部族連合から封建社会の中央集権帝国まで、中国古代の政治制度は何度も重大な変革を経験し、それぞれの変革には社会構造の調整、経済の発展、文化の交流と融合が伴っていた。したがって、中国古代政治制度の変遷と社会発展への影響を研究することは、中国歴史の発展の流れを理解し、中国社会の発展の法則を把握する上で重要な意義を持つ。

先秦時代、政治制度の起源と初歩的な発展原始社会では、中国は部族連合の段階にあり、禅讓制を実行していた。部族連合の首長は推挙によって選ばれ、この制度は原始社会の民主性を体現していた。生産力の発展と私有制の出現に伴い、禅讓制は徐々に世襲制に取って代わられた。夏朝は中国歴史上最初の奴隷制国家で、王位世襲制を確立し、これによって「公天下」は「家天下」に変わった。商朝は政治制度をさらに発展させ、内服外服制度を実行した。商王は内服地区を直接統治し、外服地区は方国の首長が管理するが、商王に臣従する必要があった。西周時代には、政治制度は奴隷制時代の頂点に達し、封建制と宗法制度を実行した。封建制は土地と人民を諸侯に封じ、諸侯国を築き、王室を守るためにした。宗法制度は血縁関係を紐帯として、嫡長子相続制を確立し、貴族内部の階級秩序を維持した。この二つの制度は相互に協調し、完全な政治体系を形成し、西周の統治を固める上で重要な役割を果たした。

秦漢時代、中央集権制度の確立と強化秦朝は六国を統一し、中国歴史上最初の統一された多民族封建国家を築いた。秦始皇は中央集権を強化するため、封建制を廃止し、郡県制を実行し、全国をいくつかの郡県に分け、中央から直接役人を任命して管理するようにした。同時に、三公九卿制を設け、皇帝の至高無上の地位を確立し、中央から地方までの官僚体系を築いた。これらの制度の確立は、中国古代の中央集権制度の正式な形成を象徴している。漢朝は秦朝の制度を受け継ぎながら、さらに発展と改善を加えた。漢武帝の時代には、「推恩令」を施行し、諸侯国の勢力を弱め、中央が地方に対する統制を強化した。また、刺史制度を設け、地方役人の監察を強化した。さらに、漢朝は察舉制を実行し、人材を官僚体系に選び入れ、国家の統治に人材を保障した。

隋唐時代、政治制度の成熟と整備隋唐時代は中国古代政治制度の発展における重要な段階で、この時期の政治制度は成熟と整備の段階に達した。隋朝は三省六部制を創設し、宰相の権力を三分し、それぞれ中書省、門下省、尚書省が決策、審議、執行を担当するようにした。三省は相互に牽制し、相互に監督し、行政効率を高め、皇権を強化した。唐朝は三省六部制をさらに整備し、この基礎の上で科挙制を実行した。科挙制は試験を通じて人

材を選び、門閥貴族が官位を独占する状況を打破し、多くの庶民地主に参画の機会を与え、統治の基礎を拡大し、社会の流動性と文化の繁栄を促進した。

宋元時代、中央集権のさらなる強化宋朝が建国した後、地方割拠勢力の再出現を防ぐため、一連の措置を講じて中央集権を強化した。中央では、二府三司制を実行し、行政権、軍権、財政権をそれぞれ中書門下、樞密院、三司が担当するようにし、さらに宰相の権力を弱めた。地方では、文官を知州に派遣し、通判を設けて知州を監督し、地方に対する統制を強化した。元朝は全国を統一した後、行省制度を実行し、全国をいくつかの行省に分け、中央の派出機関として、行省の長官を中央から直接任命し、中央が地方に対する管理を強化し、多民族国家の統一を固めた。

明清時代、君主専制の高度な強化明清時代は中国封建社会の末期で、君主専制制度は頂点に達した。明朝は丞相制度を廃止し、内閣を設け、皇帝の顧問機関として、皇帝の政務処理を補佐するようにした。清朝はさらに皇権を強化し、軍機処を設け、軍機大臣は皇帝の旨意に従って事を行うだけで、軍国大事はすべて皇帝一人の裁決に委ねられた。また、明清時代は八股取士と文字獄を実行し、思想文化に対する統制を強化し、人々の思想を禁錮した。

中国古代政治制度の変遷には多様な原因があり、その中で最も重要な原因は経済的な基礎の変化である。生産力の発展に伴い、社会経済形態が絶えず変化し、原始社会の公有制経済から奴隷社会の奴隷制経済、そして封建社会の封建地主経済へと移行した。経済的な基礎の変革ごとに、政治制度もそれに適応する必要があった。例えば、春秋戦国時代には、鉄製農具と牛耕の普及に伴い、封建的な土地私有制が徐々に確立され、新興の地主階級は古い政治制度を打ち破り、自身の発展に有利な政治制度を築こうとした。これが封建制の崩壊と中央集権制度の形成を促した。また、政治制度の変遷には、政治闘争、民族融合、文化伝統などの要素も影響を与えている。

中国古代政治制度の変遷には以下のような特徴がある。

一つは、君主専制が絶えず強化されることである。秦朝の皇帝制度の確立から明清時代に君主専制が頂点に達するまで、皇帝の権力が拡大し、中央集権が強化された。

二つ目は、中央が地方に対する統制が絶えず強化されることである。封建制から郡県制、さらに行省制へと移行するにつれて、中央が地方に対する管理がますます直接的で効果的になった。

三つ目は、官僚体系が絶えず整備されることである。秦漢時代の三公九卿制から隋唐時代の三省六部制、そして明清時代の内閣と軍機処まで、官僚機構の設置がますます合理的になり、分工が明確になり、行政効率が向上した。

四つ目は、選挙制度が絶えず発展することである。先秦時代の世卿世禄制から漢朝の察举制、そして隋唐時代の科挙制まで、選挙制度がますます公平・公正になり、国家にたくさんのお優秀な人材を送り出した。

中国古代政治制度は社会経済の発展に深遠な影響を与えた。一方で、中央集権制度の確立と整備は、社会経済の発展に相対的に安定した政治的環境を提供した。統一された国家は、大規模な工事建設に力を集中させることができ、例えば秦朝の万里の長城、隋朝の大運河などがそれにあたる。これらの工事建設は交通の発展を促し、地域間の経済連絡を強化し、商品の流通と経済の繁栄に役立った。もう一方で、一部の政治制度は経済発展に一定の阻害作用を与えた。例えば、明清時代の海禁と鎖国政策は、対外貿易の発展を制限し、中国を徐々に世界の潮流から後れさせた。重農抑商政策は、ある程度は農業生産を保護したが、商業と手工業の発展を抑制し、資本主義の萌芽の成長を妨げた。

政治制度は文化発展にも重要な影響を与えた。中央集権制度の下で、国家は文化建設に資源を集中させることができ、例えば漢朝の太学、唐朝の国子監など。これらは多くの人材を育成し、文化の繁栄を推進した。科挙制の実行により、読書が人々が官位に就く主要な道となり、人々の学習意欲が刺激され、文化の伝播と発展が促進された。しかし、一部の政治制度も文化発展にマイナスの影響を与えた。例えば、明清時代の八股取士と文字獄は、人々の思想を厳しく縛り、文化の創造精神を殺し、文化発展が徐々に硬化する方向に向かわせた。

中国古代政治制度は民族融合を促進する上で重要な役割を果たした。統一された多民族国家の築き上げと発展は、各民族間の交流と融合の広い舞台を提供した。中央政府は、和親、冊封、羈縻府州の設置などの一連の政策を実行することで、少数民族地区の管理を強化し、各民族間の経済文化交流を促進し、民族間の理解と信頼を深め、民族融合のプロセスを推進した。例えば、唐朝の寛容な民族政策により、各民族間で相互に交流し、相互に学び、「和同一家」の局面が形成された。

中国古代政治制度の変遷は、長く複雑な過程であり、中国社会の発展と密接に関係している。先秦時代の政治制度の起源から明清時代の君主専制の高度な強化まで、それぞれの段階の政治制度には独自の特徴と歴史的意義がある。これらの政治制度は、国家の統一を維持し、社会の安定を促進し、経済文化の発展を推進する上で重要な役割を果たしたが、いくつかの限界も存在した。中国古代政治制度の変遷と社会発展への影響の研究を通じて、我々は経験と教訓を吸収し、現代社会の発展に有益な参考を提供することができる。現代において、我々は中国の特色ある社会主義制度を堅持し、改善し、国家治理体系と治理能力の現代化を絶えず推進し、中華民族の偉大な復興の夢の実現に堅実な制度的保障を提供する必要がある。

子供の犯罪及び教育方法

李 睿鋒

現在、児童犯罪は現代社会が直面している重要な問題となっている。社会環境の変化や家庭教育の多様化に伴い、ますます多くの若者が犯罪の泥沼に陥り、管理が難しくなっている。本論文の目的は、児童犯罪の原因を探り、効果的な教育方法を提案し、児童犯罪を抑制し、子どもたちが困難を乗り越えるための理論的知識を提供することにある。

1. はじめに

近年、世界規模で児童や青少年の犯罪現象が徐々に増加している。これは避けられない問題であり、この問題は社会の安全や安定に関わるだけでなく、子ども個人の成長や発展にも影響を与える。そのため、児童犯罪を効果的に予防し、減少させる方法を探ることは、社会、家庭、教育制度の重要な課題となっている。

児童犯罪とは、未成年者が法律や規範に違反し、一定の責任を負う行為を指す。これらの行為は単なる違法行為にとどまらず、社会的適応能力の欠如を伴うことが多い。児童犯罪に対応するためには、教育方法の改革と革新が非常に重要である。本論文では、児童犯罪の原因を分析し、その背景や根本的な要因を探り、家庭、学校、社会環境の中で多様な教育方法を通じて問題を解決する方法を議論する。

2. 児童犯罪の原因分析

児童犯罪の原因は多岐にわたり、社会的要因、家庭的要因、個人的な心理的要因が絡み合っている。

(1) 社会環境の影響

現代社会の変革は多くの課題を生じさせた。都市化の進展、情報化時代の到来、社会文化の多様化により、子どもや青少年が直面するプレッシャーは増大している。社会環境には物質的な追求や成功の追求が普遍的に存在し、特に不適切な価値観が子どもたちに与える影響は極めて重要である。特に暴力、薬物、不良な娯楽の広まりなどは、子どもを犯罪に導く引き金となる。

また、貧困や失業問題も児童犯罪の重要な誘因である。貧困家庭の子どもは十分な資源やサポートを欠き、犯罪に陥りやすい。社会的不公正、階級の固定化、教育機会の不平等もこの問題を加速させる要因となる。

(2) 家庭教育の影響

家庭は子どもの成長において最初の環境であり、その性格や行動の形成に不可欠な役割を果たす。研究によれば、犯罪行為の多くは不適切な家庭教育と深い関係があることがわかっている。例えば、親の離婚、家庭内暴力、愛情不足、教育の欠如などが子どもの心理的発展に悪影響を及ぼす。家庭での温かさや効果的な教育が欠けていると、子どもは自己防衛のために不正行為を行ったり、注目を引くために違法行為を行ったりすることがある。また、過度の甘やかさや厳しすぎる教育方法も、子どもに極端な行動を引き起こす原因となる。

(3) 学校と仲間の影響

学校は子どもたちが社会化する重要な場であり、学校内での人間関係や同級生との交流は、子どもの行動パターンに大きな影響を与える。学校にいじめや暴力などの問題が存在すると、子どもはそれを模倣したり、虚偽の自尊心や帰属感を満たすために関与したりすることがある。また、仲間からの不良な影響も、子どもを犯罪の道に引き寄せることがある。

学校教育が不十分または不適切であれば、児童犯罪の原因となることがある。学校が学生の問題に気づき、介入することができなかつたり、心理的サポートが不足していたりすると、孤独感や困惑感から不正行為に走ることもある。

(4) 個人の心理的発達の問題

外部環境の影響に加えて、子ども自身の心理的発達や行動特性も犯罪の重要な要因となることがある。心理的障害や感情的な問題を抱えた子どもは、極端な行動や暴力的傾向を示すことがある。また、感情の管理ができず、衝動的で抑制が効かないことも、多くの子どもが犯罪に至る原因である。

一部の子どもは幼少期にトラウマ的な経験（家庭内暴力や性的虐待など）を受けている。これらのトラウマは、大人にとっても深刻な打撃となるが、発達途上の子どもにはさらに大きな影響を与える。こうした経験をした子どもは心に深い傷を負い、将来の行動パターンに影響を与えることがある。これらの子どもが適切な心理的治療を受けられないと、反社会的行動に発展することが多い。

3. 児童犯罪予防のための教育方法

児童犯罪を効果的に予防し、減少させるためには、教育方法の改革が極めて重要である。以下は、私が個人的に効果的だと考える教育方法である。

(1) 家庭教育の強化

家庭教育は児童の成長において基礎的な役割を果たす。親は教育者としての役割を果たさなければならない。まず、親は子どもに温かく調和の取れた家庭環境を提供することが求められる。愛情と伴走を通じて、親子の絆を深め、子どもが感情的な満足感を得られるようにし、不良な方法で注目を求める可能性を減らすことができる。

また、親は子どもの道徳教育や行動規範の育成にも力を入れるべきである。適切なルールを設定し、報酬と罰をバランスよく与えることで、子どもが社会の規範や正しい法的認識を理解できるように手助けする。親は子どもにとって最良の模範となり、身をもって正しい価値観を伝えるべきである。

(2) 学校教育の改善

学校は児童犯罪予防のもう一つの重要な場である。学校は道徳教育を強化し、道徳や社会的規範、心理的健康教育を日常的な教育に組み込むべきである。法治教育講座や心理カウンセリング、社会実践活動を通じて、学生の社会的責任感や法的認識を高め、正しい世界観、人生観、価値観を構築できるように支援する。

学校はまた、積極的で健康的なキャンパス文化を育むべきであり、校内暴力や不良な風潮の広がりを防ぐべきである。同時に、教師は学生とのコミュニケーションを強化し、学生の感情や心理的問題を早期に発見し、専門的な介入やカウンセリングを行うべきである。

(3) 社会的サポートと介入の強化

家庭や学校の教育に加え、社会的サポートや介入も同様に重要である。政府は、困難な状況にある子どもたちを支援するために、より多くの社会的資源や心理的健康サービスを提供すべきである。例えば、青少年のための心理相談センターを増設し、定期的に心理健康のスクリーニングを行い、問題を抱える子どもたちに迅速に支援を提供するべきである。

また、社会公益団体や地域社会も、子どもたちへの関心を強化し、豊富な課外活動を提供することで、子どもたちが積極的で建設的な興味や趣味を見つける手助けをし、負の影響を受けにくくするべきである。

(4) 個別化された教育介入

すべての子どもは独自の存在であるため、教育方法もそれぞれに合わせて調整されるべきである。行動に問題がある子どもや心理的障害を抱えている子どもには、個別化された教育介入が必要である。これには、専門的な心理カウンセリング、行動修正訓練、感情的

支援が含まれる。個別化された教育方法を通じて、子どもたちは自らの心理的問題を克服し、良好な行動習慣を育むことができる。

4. 結論

児童犯罪は非常に複雑な社会問題であり、その背後には多くの要因が絡み合っている。児童犯罪を効果的に予防するためには、教育方法の革新、変革、実践が特に重要である。家庭、学校、社会は協力し合い、家庭教育を強化し、学校教育を改善し、社会的サポートを提供し、個別の介入を行うことで、子どもたちの健康的な成長のための良好な環境を作り上げるべきである。多方面からの協力と科学的な教育方法を通じて、児童犯罪を効果的に減らし、子どもたちが正しい道を歩む手助けができる。

スマホアプリが日常生活に与える影響

李 周語

2007年、アップルが初代iPhoneを発表し、スマートフォン時代の幕開けを迎えた。2008年にはApp Storeが登場し、ユーザーに初めて集中型のアプリのダウンロードプラットフォームを提供した。スマートフォンの爆発的な普及に伴い、アプリケーションの数は急増した。21世紀の10年代には、開発者はゲームからソーシャルメディアアプリ、モバイル決済、オンラインショッピングアプリまで、さまざまな種類のアプリを作成した。あらゆるタイプのアプリケーションが急速に発展した。近年では、人工知能や機械学習技術の進歩により、アプリケーションがさらに賢く、個別化されるようになり、さまざまなインテリジェントプログラムが発展し始めている。健康とフィットネスアプリの普及は、ユーザーが健康とライフスタイルをより良く管理するのに役立っている。

スマートフォンの普及とモバイルインターネット技術の発展に伴い、アプリケーションは私たちの日常生活のあらゆる面に深く浸透した。2023年の時点で、全世界のスマートフォンユーザー数は35億人を超えており、スマートフォンの普及がアプリケーションの広範な利用を支えている。現在、ソーシャルメディア、通信、ゲーム、ショッピング、金融、健康、教育、エンターテインメントなど、さまざまなタイプのアプリケーションがあらゆる場所に存在している。データによれば、平均的なスマートフォンユーザーは約60~90個のアプリをインストールし、1日に約30個のアプリを使用している。これらのアプリは、ユーザーに便利なツールやサービスを提供するだけでなく、私たちの行動様式、コミュニケーションの仕方、消費習慣などに深い影響を与えている。

ソーシャルアプリケーションであるWeChatの普及により、人々はいつでもどこでもコミュニケーションが取れるようになった。伝統的な対面での交流や電話連絡は、即時メッセージ、音声通話、ビデオ通話に取って代わり、ユーザーはいつでもどこでもソーシャルプラットフォームを通じて友人や家族と連絡を取ることができるようになった。このアプリは、職場での即時のコミュニケーションや家族や友人との日常的な連絡にも大いに役立ち、感情的なつながりを強化する。InstagramやWeiboなどのソーシャルメディアプラットフォームでは、ユーザーが個人の生活を共有できるようにし、地域の制約を打破し、世界中の人々がネット上で交流できるようになった。

ニュースアプリや読書アプリは、人々が情報にアクセスする方法を劇的に変えた。ユーザーはもはや伝統的なメディア、新聞、テレビに頼ることなく、スマートフォンアプリを通じて最新のニュースや記事、話題のディスカッションを即時に取得できるようになった。これらのアプリは、ユーザーの興味に基づいてパーソナライズされたコンテンツを提供し、情報のやり取りをより効率的で即時にした。スマホゲーム、動画、音楽プレーヤー、電子書籍などのアプリは、忙しい生活の中でリラックスする方法を提供し、どこでも豊富なリラクスの選択肢を提供して、ストレスを和らげ、良い気分を保つのに役立つ。

日常業務において、このアプリケーションの広範な使用は、作業効率と生産性を向上させる。Microsoft Officeなどのビジネスアプリケーションは、ファイル共有、チームコラボレーション、プロジェクト管理をより効率的にし、これらのアプリケーションは日常業務に欠かせないものとなっている。特に、リモートワークやオンラインオフィスの急増に伴い、さらに重要性が増している。加えて、このアプリケーションは教育の便宜も提供している。多くの学習アプリケーションは、学習方法をより柔軟で個別化されたものになっている。私たちは、新しい言語を学ぶためや専門スキルを向上させるための豊富なリソースを提供している。

さらに、カレンダー、計算機、メモ帳などのツールに基づくアプリケーションは、ユーザーが自分の時間、タスク、個人的な予定をより良く管理し、忘れてたり先延ばしにしたりするのを防ぐのに役立つ。現代のスマートフォンアプリケーションは、短時間で多くの作業を完了することを可能にする。例えば、スケジュール管理、タスクリマインダー、電子メール処理、ファイルの保存と共有は、スマートフォンアプリケーションを使用して簡単に行うことができる。これらのツールは私たちの生活をより効率的にし、大量の時間を節約してくれる。

淘宝、拼多多、AmazonなどのECプラットフォームの登場により、ショッピングアプリは消費者の購買習慣を大きく変える。ユーザーはもはや店舗を訪れる必要がなく、スマートフォンを通じていつでもどこでも製品を閲覧し、注文し、配送サービスを利用することができる。さらに、Alipay、WeChat Payなどのモバイル決済アプリにより、決済がより便利で安全になり、消費者はさまざまな支払い操作を簡単に行うことができ、無現金社会の到来をさらに加速させる。

健康とフィットネスのアプリケーションは、多くの人々の日常生活の一部だ。これらのアプリは、運動データの記録、フィットネストラッキング、食事の記録、睡眠の監視、健康に関するアドバイスの提供、フィットネスプランの策定などの機能を通じて、ユーザーが健康的なライフスタイルを維持し、健康的な習慣を促進するのを助ける。スマートフォンを通じて、ユーザーはいつでも歩数、カロリー消費、運動強度などを確認でき、健康管理の意識を大幅に高めることができる。

スマートデバイス（例：スマートバンド、スマートウォッチ）との連携により、健康管理はよりスマートで個別化されました。同時に、瞑想やメンタルヘルス系アプリも人気を集め、ユーザーのストレスを軽減し、心身をリラックスさせる手助けをしている。ナビゲーションや移動系アプリ（例：Googleマップ、滴滴出行など）は、ユーザーの移動をより便利にしました。リアルタイムの交通情報やルートプランニングにより、渋滞を避け、移動時間を短縮し、タクシーを使うことで個人車を所有せずとも便利に移動できる。一部のアプリは、ユーザーの安全感を向上させることもできる。例えば、位置情報追跡や家庭の安全監視などのアプリは、ユーザーに緊急時に迅速に対応する手段を提供する。

スマートフォンのアプリケーションは、私たちの日常生活に多くの便利さをもたらしていますが、過度に使用したり、不適切に使用したりすることが、いくつかの悪影響を引き起こすこともある。特にソーシャルメディアやエンターテインメント系のアプリケーションは、夜遅くまで夢中にさせることが多く、正常な生活リズムに悪影響を与える可能性がある。また、ブルーライトが人体のメラトニン分泌に影響を与え、寝つきが悪くなることで、睡眠の質や身体の健康に悪影響を及ぼすことがある。長時間スマートフォンを使用し、特にスマートフォンを下向きにして見ることは、首や目に関する健康問題を引き起こすことがある。例えば、頸椎の問題や目の疲れ、乾燥などの症状は、現代人によく見られる健康問題となっている。

スマートフォンのアプリケーションは遠距離コミュニケーションを促進しますが、対面での交流の機会を減少させる可能性もある。これにより、対面でのコミュニケーションが減り、「ソーシャルアイランド」のような現象が生じることがある。特に、長時間仮想世界に浸っている人は、孤独を感じやすくなり、実際の人間関係に悪影響を与えることがある。

いくつかのスマートフォンアプリケーション、特にソーシャルメディアやゲームは、そのデザインが非常に魅力的であり、過度に依存してしまうことがある。これが「スマホ依存症」を引き起こし、ユーザーが現実世界の重要な事柄を無視する原因になることがある。アプリケーションのプッシュ通知やソーシャルメディアの更新、ニュース、ゲームなどは、ユーザーの集中力を絶えず妨げる。特に仕事や学習など、集中する必要のある場面では、頻繁にスマート

フォンを確認することで気が散り、作業効率が低下したり、学習効果が悪くなったりすることがある。

スマートフォンアプリケーションの便利さにより、人々はますますそれらに依存して問題を解決しようとする傾向がある。この依存が、人々の創造力や独立した思考能力を抑制する可能性がある。例えば、ナビゲーションアプリに頼って道を覚えなくなったり、検索エンジンに頼りすぎて深く考えなくなったりすると、長期的には思考が浅くなる可能性がある。多くのスマートフォンアプリケーションは、ユーザーの個人情報、位置情報、連絡先などのデータを収集する必要がある。これらのデータが適切に保護されない場合、漏洩や悪用される可能性があり、ネット詐欺や身分盗用などのセキュリティリスクを引き起こすことがある。

全体的に見て、日常生活において、スマートフォンアプリは人々の生活のあらゆる側面に深遠な影響を与え、日常生活に深く浸透している。これにより、生活の便利さと効率が大幅に向上しましたが、一方で多くの危険ももたらしている。私たちはその積極的な効果を十分に活用し、過度の依存を避け、技術が生活を支えるものであり、生活を置き換えるものでないことを確保すべき。適切に使用すれば、技術がもたらすすべての便利さを享受しつつ、潜在的な負の影響を減らし、生活のバランスと健康を保つことができる。

服飾デザインにおける革新

陸 千尋

アートメディアには、デジタルメディア、ソーシャルメディア、オンラインアートプラットフォーム、従来のメディア(テレビ、新聞など)、美術展、ファッション雑誌などが含まれるが、これらに限定はされない。アート情報を宣伝し、アートワークを展示するためのさまざまなメディアとプラットフォーム。これらはアートワークを提示するだけでなく、コンテンツ作成、インタラクティブ放送などを通じてアートコンセプトの普及と更新に貢献し、文学的創造性のためのより広範な舞台と観客基盤を作り出す。

アートメディアはデザインのインスピレーションの源であり、美術館や衣服のデザインなど、私たちの生活に溶け込んでいる。デザイナーは、自分のアイデアをさまざまな時代の芸術作品と組み合わせ、独自の新しいアイテムを作成することもできます。デジタルアートの抽象的なパターン、伝統的な芸術の色、建築様式の構造や特徴はすべてデザインの作成に使用できる。さまざまな要素、情報、色があるからこそ、より多くの可能性を生み出し、デザイナーのアイデアを豊かにすることができ、特定の場所や時代に限定されない特徴的な美学を生み出すこともできる。

現在の社会は環境保護のリサイクル可能な材料を提唱し、芸術メディアの範囲で新しいトレンドになった。メディアの報道を通じて、これらの材料を使用してデザイン理念を普及させ、リサイクル可能な作品を展示していく。芸術メディアは、人々のリサイクル可能な材料に対する認識度を高め、デザイナーの創意精神の興味と情熱を刺激するものである。多くの芸術メディアはフォーラムを組織してお互いに交流し、心得を学び、建築家ブランドと環境保護組織の間の架け橋となり、服飾産業の発展を共に推進していく。ネット上では、リサイクル可能なアイテムを使って作られた服をたくさん見かける。新聞のゴミ袋や、使わない紙コップは、服を作る材料としても使用できる。そして、エコファッションショーに関するイベントもたくさんあり、リサイクル素材で作った服はとても美しく特別なものとして考えられる。ファッションにおける持続的発展は世界的な追求であり、社会の未来の運命に関わる。このような概念はすべての学科の研究に貫くといえる。

最近では3D印刷技術という新しい技術がある。3D印刷技術の導入に伴い、服飾デザインに大きな変化と創意をもたらした。デザイナーは3Dモデリングのソフトウェアで多くの複雑な服飾構造を設計し、3Dプリンターを通じて平面のデザインを3Dの実物に変換することが可能となった。このような技術は、流線型、スケルトン構造など、伝統的な工芸では完成できない創造を実現するだけでなく、設計から完成品までの周期を大幅に短縮し、生産にかかる時間コストを削減していく。3Dプリントで製作された服は、芸術と科学技術を融合させ、ファッション界の大きな革新と言える。

アートメディア、特にデジタルメディアとソーシャルメディアは、服飾デザインにより強いインタラクティブ性と参加感を与える。デザイナーたちはARやVRの科学技術を利用して、ユーザーがインターネットで服を試着して自分でDIYで異なるコーディネートスタイルを体験することができる。インターネットを通じてデザインコンテストを立ち上げ、デザインをより市場の需要に合わせ、ブランド側と消費者の間の相互作用とリンクを強化していくことは、デザインの個性的なサービスを体現し、服飾文化の普及と交流を促進していく。芸術と科学技術の深い融合は、スマートウェアラブル機器の興隆を促した。これらの設備は伝統的な服装の機能を備えているだけでなく、内蔵センサー、LEDスク

リーンなどの技術を通じて、健康監視、情報リマインダー、娯楽相互作用など様々な機能を実現させた。

アートメディアはこれらの革新的な製品を報道することで、スマートウェアラブル服に対する大衆の認識と受容度を高め、デザイナーのスマート服デザインに対する探求の熱意を刺激した。アートメディアは服飾の革新的なデザインにおいて重要な役割を果たしているが、まだいくつかの課題に直面している。例えば、どのように芸術性と実用性のバランスを取るか、どのようにデザインの革新を維持しながら、製品の持続可能性と環境保護性を確保するか、そしてどのように急速に変化する市場の需要と消費者の好みに効果的に対応するかなどだ。将来、人工知能、ビッグデータ、モノのインターネットなどの技術のさらなる発展に伴い、アートメディアと服飾デザインの融合はさらに深まるだろう。デザイナーはAI補助設計を利用して、様々な設計案を迅速に生成することができる。ビッグデータ分析を通じて、市場の動向と消費者の好みを正確に予測していく。モノのインターネット技術を利用して、服装と環境のスマートインタラクションを実現する。これらの技術の応用は、服飾デザインの革新をさらに推進し、消費者にもっと豊かで個性的な着用体験をもたらす。

以上のことを要約すると、ニューメディアが世界中でますます重視されるにつれて、ニューメディアアートもより大きな発展の余地があると言える。私たちはニューメディア芸術の発展傾向をタイムリーに把握し、各種の革新的な応用を研究することで、自国のニューメディア芸術のレベルを高め、このような新しい経済成長を促進し、国家のソフトパワーを高めることができるだろう。

【参考文献】

1 :

<https://mr.mbd.baidu.com/r/1x4l8DcVaKs?f=cp&rs=2242455023&ruk=Ry7GEYkhlqvmhTvCuYAK6w&u=c8af04df166cbce2>

【数字媒体艺术、新媒体艺术、跨媒体艺术区别 📍 艺术与科技融合的今天，数字媒体艺术、新媒体艺术和跨媒】

2 :

<https://mr.baidu.com/r/1x4lUkXjMuQ?f=cp&rs=4168266489&ruk=Ry7GEYkhlqvmhTvCuYAK6w&u=498082a17bf015fe>

3 :

<https://mi.mbd.baidu.com/r/1x4m9MSOVRS?f=cp&rs=2243535338&ruk=Ry7GEYkhlqvmhTvCuYAK6w&u=f0cb8552a31b4118>

鳥はなぜ飛ぶのか

龍 章豪

鳥類は地球上で最も魅力的で奇妙な生物の一つであり、その飛行能力はその特徴的な特徴の一つだ。飛行は単なる生理的機能ではなく、自然環境への適応や生存のための重要な手段でもある。なぜ鳥は飛ぶことができるのだろうか。この問いへの答えは、生物学、物理学、エコロジーなど、複数の分野に関連している。鳥類の飛行能力を深く掘り下げて探ることで、鳥類の進化の歴史、身体的な構造、そして生態系における独自の役割をより全面的に理解することができる。

飛行の基本的な物理原理は、揚力、推力、重力、抗力という4つの力に基づいている。これらの力が相互に作用することで、鳥は空中を自由に飛ぶことができる。

まず、揚力だ。揚力は鳥が空中を飛ぶための主要な力だ。鳥の羽は特別な形状をしており、通常、上面が曲線状で、下面は比較的平らだ。ベルヌーイの原理に基づき、空気が羽を通過するとき、羽の上面を流れる空気の速度は下面よりも速く、これにより上面の気圧が低くなり、揚力が生じる。揚力の大きさは、羽の角度、飛行速度、空気の流れの速さによって決まる。そのため、鳥は羽の角度や羽ばたきの頻度を調整することで、十分な揚力を得ることができる。

次に推力である。推力は鳥が空気抵抗を克服し、自身を前進させる力のことだ。鳥は羽ばたきによって推力を生み出すことができる。羽が下に押し込まれるたびに、鳥の体は前方に押し出され、羽が上がる時には空気抵抗が減少し、継続的な推進力が生じる。この推力と揚力は共に作用し、鳥が飛行を実現するのに役立つ。重力は地球が鳥を引き寄せる力であり、鳥を地面に引き寄せる。飛行するためには、鳥は揚力を使って重力を克服しなければならない。鳥の軽量化された構造は、この飛行能力を実現するための重要な要素だ。

最後に抗力があり、これは空気が鳥の飛行に対して働く反作用力のことである。飛行速度が速くなると、空気抵抗も増加していく。鳥は飛行姿勢を変えたり、羽の形状を調整したり、最適な飛行ルートを選んだりすることで、抗力を減らし、飛行効率を高めることができる。これらの力が総合的に作用することで、鳥は地球の引力を克服し、空中での飛行を維持することができるのだ。

鳥類が飛ぶことができるのは、物理学の原理だけではなく、その独自の生理的な構造が根本的な保障となっている。骨から筋肉、羽毛、呼吸器系に至るまで、鳥の体の特徴はすべて飛行に密接に関連している。

・骨格の軽量化

鳥の骨格は非常に特殊な進化を遂げており、軽量化の特徴を強く持っている。鳥の骨はほとんどが中空であり、骨の強度を保ちながら体重を大幅に軽減している。この軽量の骨構造は、鳥が飛行するために非常に重要な要素だ。哺乳動物の実心の骨と比較して、鳥の骨格は空中飛行に必要な軽さと強靭さを兼ね備えている。

・強力な胸筋

鳥の胸部の筋肉は非常に発達しており、特に胸大筋と胸小筋が重要な役割を果たしている。胸大筋は羽を下に押し込むことで推力を生み出し、胸小筋は羽を上を引き上げ、次の羽ばたきの準備をする。強力な胸筋は、鳥が長時間飛行を維持するために必要な力を提供している。

・羽毛の特別な構造

羽毛は鳥の飛行においてもう一つの重要な特徴だ。飛行用の羽毛は軽く弾力性があり、空気の流れを通すときに摩擦が少なく、飛行中の抵抗を減らすことができる。羽毛の配置と形態は長い進化の過程で調整され、鳥が羽の動きを精密にコントロールできるようになり、飛行効率を高めることができるのだ。

飛行は非常に多くのエネルギーを消費する活動であるため、鳥は非常に効率的な呼吸システムを持っている。鳥の肺と空気嚢は連動しており、吸気と呼気の過程で絶えず酸素を供給し、筋肉に十分な酸素を供給する。哺乳動物と比較して、鳥の呼吸システムは高速飛行時に大量の酸素を必要とする要求により適している。

また、鳥の代謝率は他の多くの動物よりも高い。飛行を支えるために、鳥は食物を迅速にエネルギーに変換する必要がある。そのため、鳥は飛行の前に特に多くの食物を摂取することが一般的だ。これらの生理的特徴により、鳥は低いエネルギー消費で長時間、高強度の飛行を行うことができるのだ。

進化の観点から見ると、鳥類の飛行能力は最初から存在していたわけではなく、自然選択を通じて徐々に進化してきたものだ。鳥類の飛行能力は恐竜の先祖から起源を持ち、次のように進化してきた。恐竜と鳥類の関係鳥類は恐竜の子孫であり、特に小型の羽毛を持つ肉食性の恐竜に由来する。現代の鳥の多くの特徴、例えば羽毛や骨構造などは、これらの恐竜に由来している。何億年にもわたる進化の過程で、これらの恐竜は飛行に適した羽を発展させ、最終的に今日の鳥類へと進化した。

・飛行の適応的な利点

飛行は鳥類に多くの生存上の利点をもたらす。まず、飛行は捕食者からの逃避に役立つ。鳥類が危険から迅速に脱出することを可能にします。次に、飛行は鳥が広い範囲で食物を探すのを助け、特に森林や草原など広大な環境では、食物を見つける範囲を広げることができる。さらに、飛行は鳥に移動能力を提供し、大きな地理的領域を越えて繁殖地や住処を探すことを可能にする。

・飛行と繁殖

飛行は鳥類の繁殖にも重要な意味を持っている。多くの鳥は飛行によって配偶者を見つけたり、巣を作ったりする。また、飛行能力により、異なる季節において鳥が移動し、過酷な気候条件を避けることができる。これらの要素は鳥類が生態系で重要な地位を占めることを助けている。飛行は鳥類に生存上の利点をもたらすだけでなく、生態系全体にも重要な影響を与えている。鳥は生態系の中でさまざまな役割を果たしており、特に種子の拡散、害虫の制御、生態バランスの維持において重要な役割を果たしている。

・天敵からの逃避

飛行能力は、鳥が天敵から逃れるための重要な手段でもある。捕食者に遭遇した場合、鳥は迅速に危険な地域を飛び立ち、捕食されるリスクを減らすことができる。さらに、飛行の機動力により、捕食者の追跡をかわすこともできる。

・移動

鳥類の移動行動は典型的な飛行行動の一つだ。多くの鳥は毎年長距離を移動し、適切な生息地や繁殖地を探す。飛行を使うことで、鳥は季節ごとに数千キロメートルを移動し、環境の変化に適応する。

結論

鳥類の飛行能力は、進化の過程で不可欠な要素であり、さまざまな生理的および行動的メカニズムに支えられている。鳥の解剖学的構造、羽毛の特殊な構造、翼の筋肉の強さ、飛行の空気力学的原理が相互に作用して、鳥が飛行することを可能にしている。また、飛行は鳥の生存と生態系において重要な役割を果たしており、食物の探索、天敵からの回避、さらには移動行動を支えるために必要不可欠なものだ。鳥類の飛行の進化とメカニズムは、自然界の驚異と複雑さを示すものであり、生物の適応と進化について深く理解するための貴重な例となる。

文化の多様性と都市の包括的成長の関係に関する研究

廖 佳橋

要旨：本論文では、文化の多様性と都市の包括的な成長の間の緊密な関係を検討していく。都市の経済、社会、環境など、都市の発展における文化の多様性の反映を分析することによって、文化の多様性が都市の包括的な成長を促進することを明らかにする。また、都市の包容的成長が文化多様性のために良好な発展環境を提供し、両者は相互に促進し、都市の持続可能な発展を共同で推進すると述べた。

はじめに

グローバル化の進展に伴い、都市は人口、経済、文化の集積地として、ますます豊かな文化的多様性を示している。様々な人種、民族、宗教的背景を持つ人々が都市に集まり、独自の文化をもたらしている。都市の発展が追求する目標も次第に単純な経済成長から包括的成長へと変わり、すべての人が公平に都市の発展過程に参加し、その中から利益を得ることができるようになった。文化の多様性と都市の包括的な成長との間には、複雑で深い関係がある。この関係を研究することは、都市の発展法則を理解し、科学的で合理的な都市の発展戦略を制定する上で重要な意義がある。

1. 都市の中で文化の多様性を体現

(1) 人口構成の多元化の都市は異なる地域、国からの人々を引きつけて、彼らは異なる皮膚の色、言語と生活習慣を持っている。たとえば、ニューヨークは国際的な大都市であり、世界各地から移民が来て、多人種、多民族が居住し、それぞれの集団が独自の文化伝統を保持し、継承している。

(2) 豊かな文化と芸術の形の都市の建物の様々なスタイル、アートショー、音楽公演などが存在する。パリはそのロマンチックなフランスの建築で世界で有名で、同時に世界各地の芸術家の作品展示があって、各種の音楽会、演劇公演は異なった文化の背景の下で芸術形式をカバーしている。

(3) 食文化が多様な世界各地のおいしい食べ物が都市部に集まっている。ロンドンでは、伝統的なイギリスのアフタヌーンティーやフィッシュアンドチップスだけでなく、本格的な中華料理やインドのカレー、イタリアのピザなど、食文化の多様性が都市の文化的魅力の重要な部分となっている。

2. 都市の包括的な成長に対する文化の多様性の促進の役割

(1) 経済面での革新の駆動:異なる文化背景の人々は、異なる考え方と知識システムを持っている。多文化のぶつかり合いや交流はイノベーションのインスピレーションを刺激し、都市の科学技術やビジネスなどの分野に新しい理念や方法をもたらす。たとえば、シリコンバレーには世界中からハイテク人材が集まり、異文化のエンジニアや起業家が協力し合って情報技術のイノベーションを起こし、地域経済の高度成長を牽引してきた。

(2) 産業の多元化や文化の多様性は、都市産業の発展の多元化を促進するための消費ニーズの多様化を生成している。特色ある文化観光、クリエイティブ産業などの新興産業が盛んに興っている。北京を例にとると、胡同ツアー、京劇公演など伝統文化の特色を持つ観光プロジェクトが国内外から多くの観光客を引きつけている。また、798 芸術区などの創意産業園区は豊富な文化資源を頼りに、芸術創作、デザインサービスなどの産業を発展させ、大量の雇用を創出し、都市経済の包括的成長を推進しています。

(3) 社会的な側面は、社会的な統合を促進する。文化の多様性は、相互理解、尊重と包括的な異なるグループを促進していく。様々な文化活動に参加することで、人々は他の文化に対する認識を深め、文化の壁を打破し、偏見や差別を減らし、社会の調和と安定を促進することができる。例えば、いくつかの都市では、異なる文化的背景を持つ住民を参加させて、それぞれ

の文化的特色をアピールする国際文化祭を開催し、コミュニティの結束力と社会的統合を強化している。

(4) 教育の質の向上とともに、多文化環境は教育に豊かな資源を提供していく。様々な文化を背景にした教材や教師、教育法を導入することで、学生の視野を広げ、異文化コミュニケーション能力やグローバルな視野を養うことができる。国際化学校では、学生たちは様々な国の学生や先生と触れ合い、様々な言語や文化を学び、多様化した社会に適応するための基礎を築くことができるようになる。

(5) 資源投入都市は包括的成長を実現する過程で、文化インフラへの投資を拡大していく。博物館、図書館、劇場などの文化施設を建設し、異文化の展示と交流の場を提供する。同時に、文化教育事業に投資し、専門的な文化人材を育成し、大衆の文化的素養を高め、文化の多様性の繁栄と発展を促進していく。例えば、上海では文化施設への投資が増え、近代的な博物館や芸術施設が新たに建設され、様々な文化活動が行われ、市民の文化生活を豊かにし、より多くの文化的要素を集めている。

3. 開放的な雰囲気

包容的成長の都市づくりとは、開放的で包摂的な社会雰囲気を提唱し、異文化間の交流と協力を奨励している。このような雰囲気は新しい文化の要素が都市に溶け込み、文化の革新と発展を促進していく。例えば、深圳は若い移民都市として、開放的で包容的な都市精神で多くの文化創造人材を引きつけ、活気に満ちた文化革新生態系を形成しており、様々な新しい文化、思想がここでぶつかり合い、融合し、文化多様性の持続的な発展を推進している。

4. 結論

文化の多様性と都市の包括的な成長は、相互依存、相互促進の関係である。文化の多様性は都市の包括的成長のために豊かな資源と労働力を提供し、経済、社会、環境などの様々な面で都市の持続可能な発展を促進している。都市の包括的成長は文化の多様性のために、良好な発展環境を創造して、政策の保障、資源の投入と開放的な雰囲気を作るなどの措置を通じて、文化の多様性の繁栄を支持していく。このため、都市の発展の過程で、文化の多様性の価値を十分に認識し、都市の包括的な成長を積極的に推進し、文化と都市の発展の良性的相互作用を実現し、より活気に富み、調和のとれた住みよい都市を作り出すべきだ。今後、グローバル化が進むにつれて、都市がさまざまな課題に対応し、質の高い発展を実現するために、両者の関係をより深く研究し、把握することがより現実的に重要になっていくのは間違いない。

フィギュア真骨彫製法（しんこつちよせいほう）について

凌 浩博

1. 序論

近年、二次元文化の普及とともに、アニメやゲーム等の関連商品の需要が増える一方だ。フィギュア市場も急速に成長している。その中には、「真骨彫（しんこつちよう）」という技術を用いた高精細フィギュアは、従来の製品とは一線を画す存在となっている。このような真骨彫フィギュアは、コレクターの間で広く支持され、単なるキャラクターグッズではない、芸術性の高いコレクションアイテムとして見られている。本文では、真骨彫フィギュアの概念、製作工程、市場での影響、文化的意義、および今後の展望について詳しく調査する、現代フィギュアアートの発展におけるその役割を明らかにする。

2. 真骨彫フィギュアの概念と起源

「真骨彫」とは、日本の玩具業界大手である『万代』という会社が開発したフィギュア製作技術の一つである。「真骨彫製法」とは、表面的でなく骨格から造形を行う、ヒーロー本来の「存在感」とフィギュアとしての「自然な可動」の両立を追求した新製法だ。この技術の名称は、「骨彫（こつぼり）」という伝統的な技法に由来しました、「真に骨から彫る」という意味である。

従来のフィギュアは、キャラクターの外観を重視してデザインされることが一般的である、動きの自由度は限られていた。一方、真骨彫技術を採用することによる、キャラクターの動きや劇中のポーズとか再現できる可動式フィギュアの製作が可能となった。また、真骨彫フィギュアは外見の美しさと可動性を両立させている点から、従来の製品とは一線を画している。

3. 真骨彫フィギュアの制作の流れ

真骨彫フィギュアの製作は、非常に高度な技術と多くのステップが必要となる。以下は、その主要なステップを説明する。

（1）キャラクターデザインとデータ集め

製作の第一歩は、対象となるキャラクターの詳細なデザインとデータを集めることである。このステップでは、原作のデザインを忠実に再現するために、アニメーションや公式設定資料集を参考する。また、キャラクターの骨格や筋肉の構造を考え、リアルなポージングができるようにデザインを行う。

（2）3Dモデリングと設計調整

集まったデータを基準に、3Dモデリングソフトを用いてデジタルモデルを作成する。このステップでは、キャラクターのプロポーションを忠実に再現しつつ、関節の可動を考えしたデザインを求められる。また、マスクや服装の質感など、細部まで精密にデザインされている。

（3）試作と原型の製作

デジタルモデルが完成した後、3Dプリンターを用いて試作品が作成する。この段階では、実際の可動部分が予想通りに動けるかどうかを確認する、必要に応じて修正する。その後、手作業で細部を仕上げ、そして最終的な原型が完成する。

（4）原型の塗装と組み立て

原型フィギュアは灰色なので、塗装の必要がある。職人の手作業による多層塗り技術が使用される。これより、色の深みやシャドーが表現され、リアルな質感が生まれる。塗装が完了した各パーツは組み立て、このステップではフィギュアのどこかが塗装の摩耗しやすいを分かれる。そしてこの上にアップデートする。そして、最終的な製品が完成する。

4. 真骨彫フィギュアの市場への影響

真骨彫フィギュアはその精密な造形と高い可動性により、発売当初から大きな注目を集め、フィギュア市場に大きな影響を与えた。特に、日本国内だけでなく、アジアや欧米の市場でも高い人気を誇っている。このような国際的な人気は、日本の二次元文化が世界中で受け入れられ、愛されている証拠である。

また、真骨彫フィギュアはコレクターアイテムとしての価値も高く、一部の限定版は発売直後に完売し、中古市場では数倍の価格で手に入れるかもしれない。このような現象は、真骨彫フィギュアの市場価値をさらに高め、フィギュア業界全体の発展にも与えている。

5. 真骨彫フィギュアの文化的な意味

フィギュアは単なるホビーではなく、二次元文化を象徴する重要なメディアとしての役割を担っている。特に真骨彫フィギュアは、その高い芸術性と再現性により、コレクターやファンにとって大きな魅力となっている。また、真骨彫フィギュアは、現代の技術とアートの融合の象徴でもある。先端な製作技術を使用し、リアルな質感と細部の精密な再現を実現している点は、従来のフィギュアとは一線を画している。そのため、真骨彫フィギュアは単なる商品ではなく、アート作品としても評価されることが増えている。

6. 結論

真骨彫フィギュアは、単なるキャラクターグッズを超えた存在として、フィギュア業界に大きな革新を起こした。その造形と高い再現性は、ファンやコレクターに感動を与えると同時に、フィギュアアートとしての新しい価値を生み出していた。

今後も技術の進化とともに、真骨彫フィギュアはさらに展開を見ると、高級フィギュア市場を導く存在である続けるでしょう。そして、真骨彫フィギュアは単なるコレクターズアイテムとしてだけでなく、二次元文化の象徴として、更に発展すると考えている。

【参考文献】

1. バンダイ公式サイト 真骨彫フィギュアシリーズや技術に関する情報
https://tamashiiweb.com/item_brand/shinkocchou/3/?wovn=zh-CHS#sel_lang_area-modal
2. バンダイS.H.Figuarts公式ページ
<https://tamashiiweb.com/special/shf/?wovn=ja>
3. フィギュア専門メディア 電撃ホビーウェブやAmiAmi Blog
<https://hobby.dengeki.com/>
4. 真骨彫フィギュア制作の流れ 魂アイテム
https://tamashiiweb.com/t_item/57/
5. 真骨彫市場(公式サイト以外) Yahoo! Amazon Ebayなど
<https://auctions.yahoo.co.jp/>
6. アニメゲームサイト公式情報 Anime News NetworkやCrunchyroll New
<https://www.animenewsnetwork.com/>

経済学の視点から見る人間の行動制御の可能性

T・Y

はじめに

経済学において、人間の行動や選択の動機は研究の中心的なテーマの一つだ。経済学の理論は、一般に人間の行動が目的を持ち、合理的であり、個人の効用や利益を最大化することを前提としている。個人は、選択に直面した際に、自身のニーズや外部環境の条件に基づいて意思決定を行うと思う。そのため、人間の行動は単なる自発的なものではなく、環境やインセンティブメカニズムによって影響を受けている。経済学の多くの理論モデル、特に合理的選択理論、行動経済学、また市場メカニズムは、外部条件や利益のインセンティブを制御することによって、個人の行動に影響を与える方法に関わっている。本論文では、経済学の視点から人間の行動の制御可能性について考察し、その理論的基盤、操作のパス、および実現メカニズムを探り、条件を制御し利益を提供することによって、いかにして人間の行動を操ることができるかを分析する。最終的に、経済的な予測や行動介入の目的を達成する方法について論じる。

第一章：行為の目的性と価値性

1. 行為の目的性経済学仮説

人の行為は通常目的性があり、つまり各行為の背後に明確な目標がある。理性的選択理論 (Rational Choice Theory) では、個体が異なる選択に直面した場合、様々な選択のコストと収益を考慮することで、最も自分の利益に合った決定を下すと仮定している。個人の意思決定プロセスは、既存のニーズや好みに基づいて選択するだけでなく、将来の利益への期待も含まれています。行為の目的性とは、個人の行動は常に何らかのより大きな効用や利益を追求するためのものであり、そのような行動動機は予測可能であることを意味する。例えば、消費行動において、消費者は通常、異なる商品の性価格比、品質、ブランドなどの要素を評価し、その効用を最も高めることができる商品を選択する。この選択は様々な要因の影響を受けているが、最終的には自分のニーズを解決し、効用を最大化することを目的としている。2.行為の価値ある行為の価値性は、個人が選択をする際に、その行為がもたらす収益やリターンを考慮することを意味する。経済学において、効用 (Utility) は行動価値を測定する重要な指標である。1つの行為の価値は、即時の経済的リターンだけでなく、長期的な利益、社会的なアイデンティティなどの面にも表れている。例えば、企業は製品を革新し、品質を向上させることで市場競争力を高め、消費者は良質な製品を購入することでより良い生活体験を得ることができる。行為の価値性は、個人がより大きな満足や経済的リターンをもたらす行動を選択することを促す。この枠組みの下で、個人の行為は予想される収益とリスクに駆動されるため、経済学理論はしばしば人々の行為が理性的であると仮定して、自分の効用を最大化する。

2. 行動の操作可能性：経済学理論の視点

経済学の核心の一つは、政策手段や市場メカニズムを通じて人間の行動を操作・予測する方法だ。理論的には、個人の行動は環境、制度、情報、インセンティブメカニズムなどの要因に影響されるため、これらの要因を制御することで個人の行動を効果的に導くことが可能だと考えている。

①市場メカニズムと価格信号

市場は個人の行動が交差する場所であり、価格メカニズムは市場経済において最も重要な行動誘導ツールの一つである。価格の変動は消費者の購買決定や生産者の生産決定に直接的な影響を与えている。供給と需要の関係の影響を受けて、価格変動は市場参加者の行動を変える重要な要因だ。例えば、ある商品の価格が上昇すると、消費者はその商品を購入することを控える傾向にあり、生産者は供給量を増加させ、より高い価格で大きな利益を得ようとする。

行動操作の観点からは、政府や政策決定者は市場価格を調整することで市場行動に影響を与えることができる。例えば、税金や補助金を使って消費者や生産者の行動を社会的・経済的に望ましい方向へ導くことができる。政府が高額な炭素税を課すことで、企業は炭素排出量を削減し、グリーン経済への転換を促進することもできる。

②報酬と罰のメカニズム

経済学におけるインセンティブメカニズム理論では、個人の行動は外部の報酬や罰によって調整できるとされている。報酬と罰のメカニズムは市場取引の中に限らず、政策制定や組織管理にも広く存在する。企業管理においては、従業員の勤務態度、業務効率、創造性などは通常、ボーナス、昇進機会、株式インセンティブなどの物質的報酬によって駆動される。

公共政策の中でも、報酬と罰は広く利用されている。例えば、政府は財政的な補助金や税制優遇措置を通じて企業の研究開発やイノベーションを奨励し、違法行為に対しては罰を課して不徳や違法な行動を抑制する。また、行動経済学の「損失回避」理論（Loss Aversion）によると、個人は報酬よりも損失に対して敏感であるため、適切な罰則が時には報酬よりも個人の行動を効果的に変える場合がある。

③情報と意思決定フレームワークの制御

行動経済学理論は従来の合理的選択モデルを拡張し、個人が意思決定を行う際に情報の不完全さ、認知バイアス、社会的感情などの要因に影響を受けることを指摘している。したがって、個人が情報を取得する方法やそのフレームワークを制御することが行動に影響を与える重要な手段となる。

行動経済学における「ナッジ」の概念は、意思決定環境や「選択のアーキテクチャ」を微調整することで、個人が社会的福利や自己利益にかなった選択をするように導く方法を指す。例えば、政府がデフォルトオプション（例：年金プランへの自動加入）を設定することで、個人が積極的に選択をしなくても有益な決定を下せるようにすることができる。この方法は選択フレームワークを変更することで個人の行動に間接的に影響を与え、自由選択の権利を制限することなく行動を導くことができる。

3. 条件の制御と利益誘導：行動操作の道筋

①財政政策と行動操作

政府が財政政策を通じて行動を操作する重要な手段の一つは、税金と補助金政策である。税制政策は特定の商品やサービスに対する税負担を増加させてその消費を抑制したり、逆に特定の商品に対して減税を提供して需要を刺激したりすることができる。例えば、消費税が引き上げられると、消費財の価格が上昇し、それにより消費が抑制される。一方で、環境に優しい製品や技術に対する補助金は、企業や消費者により環境に配慮した製品を選択させることができる。

さらに、政府は価格制御を通じて市場行動に影響を与えることも可能だ。例えば、必需品の価格上限（薬品、食品など）や特定の商品に対する価格下限（農産物など）を設定することで、消費者の基本的なニーズを保障し、価格の急激な変動が市場に与える影響を防ぐことができる。

②社会保障と福利誘導

社会保障および福利政策は、政府が条件と利益誘導を制御して個人の行動を操作する別の重要な手段である。政府が一定の社会保障を提供することで、低所得層の消費を促進し、社会の安定を保障することができる。また、社会福祉政策は、教育、医療、住宅などの分野への投資を通じて、国民全体の生活水準と幸福感を向上させることにも貢献する。

福利政策は個人の労働供給や投資決定にも影響を与える。例えば、失業保険や手当を提供することで、政府は失業が個人に与える影響を緩和し、労働市場の安定性と社会的公平性を促進することができる。

③行動予測とデータ駆動型の意思決定

ビッグデータと人工知能技術の進展により、経済学研究はデータ駆動型の段階に突入している。個人の行動データを収集し、分析することで、政策決定者や企業は個人の将来の行動をより正確に予測し、それに応じた措置を講じることができる。例えば、消費者の購買データを分析することで、小売業者は消費者の需要を予測し、製品の価格設定、広告宣伝、在庫管理を調整することができる。

また、政府や企業はデータ分析技術を活用し、個別化されたインセンティブ措置を通じて個人の行動を誘導することができる。例えば、政府は個人の過去の行動データに基づいて、パーソナライズされた社会福祉政策を提供することにより、その政策の効果とターゲティングを向上させることができる。

4. 倫理的問題と課題

条件と利益誘導を通じて個人の行動を操作することは、経済的な利点がある一方で、倫理的・道徳的な議論を引き起こしている。行動操作の核心的な問題は、個人の自由と社会的利益とのバランスをどのように取るかという点だ。過度な行動操作は、個人の選択の自由を侵害し、「自由意志」の喪失を招く可能性がある。したがって、行動介入を実施する際には、透明性、公平性、個人の選択権への尊重を確保する必要がある。

5. 結論

経済学の観点から見ると、人間の行動は十分に操作可能であると言える。外部の条件を制御したり、インセンティブメカニズムを設定したり、情報の枠組みを導いたりすることで、個人の行動は効果的に予測・操作することができる。このような操作メカニズムは、市場経済において重要な役割を果たすだけでなく、公共政策や企業管理などの分野でも広く適用されている。しかし、操作と個人の自由の尊重とのバランスを取る方法は、今後の行動経済学と政策決定の重要な課題であり続けるだろう。

Chinese Characters in the history and nowadays

KE LANXUAN

As a kind of logograms used by about 1.5 billion people around the world, Chinese Characters has a long history. Go through the history for about 4000 years, it has been deeply developed by its plentiful users.

Just like Egyptian hieroglyphs, Chinese characters also have a stage that people create these writing things from the paint of shapes of real world objects. This is also called "Pictograms". This stage is the beginning of Chinese characters. According to archaeological discoveries, the earliest Chinese characters people ever found, called "Oracle bone inscriptions" were written in the Shang dynasty, more than 3000 years ago. Just as its name, these scripts were written on animals' bones. Shang dynasty's rulers were extremely superstitious, they held plenty of rituals to communicate with gods and ghosts, or their ancestors. Oracle bone inscriptions were mainly used for divination. Each of the script contains an independent meaning. From my point of view, in Chinese character's "youth time", people tend to simply create a new script to describe an object. As the developing of the language, more and more scripts were created. When keep creating new scripts will make the language too complex for there are too many scripts to memorize, the users of the scripts began to create "words" (consist of two or more scripts) instead of new scripts. This phenomenon appeared in Qin Dynasty.

Except creating scripts from the shape of the real object, there also two different methods ancient Chinese people used to create new scripts. One is called "pictophonetic characters". This kind of scripts were usually consist of two parts. One part shows the meaning, or related to the meaning. Another part shows the pronunciation. For example, the Chinese character "河" which means "river", is combined with two parts. The left part "氵" is a variant of the Chinese character "水", which means water. The right part is "可", which shows the pronunciation. Another method is to create ideograms. This is to combine two or more parts together to create a new script, and the new script's meaning is from the parts it includes. For example, the script "森" which means "forest". It is consist of three "木", which means "tree". Plenty of trees growing together, that can be called as "forest". The three methods of Chinese character's creation bring benefits. When a Chinese character user meet a script which he has never seen before, he can still identify the meaning and pronunciation of the script. Although as the developing and changing of Chinese characters, it's difficult to identify some scripts, but it's still working at other times. And since each script has its own meaning, the words consist of scripts could also be recognized through combining meanings of each character.

After the initial stages, Chinese characters underwent significant development during the Qin Dynasty. To consolidate his rule, Emperor Qin Shi Huang ordered the unification of the script. Prior to this, the seven states of the Warring States Period each used different writing systems. After unifying the six kingdoms, the emperor not only integrated their territories but also took measures to standardize culture. The new script was called "Zhuanshu" or "seal script." Its strokes were characterized by uniform thickness and a rigorous structure. Unlike later styles of Chinese characters, which featured varying stroke thickness and forms, seal

script emphasized the aesthetic appeal of evenly thick lines arranged in a balanced and interwoven manner.

After the Qin Dynasty, a script called clerical script (隶书) emerged during the Han Dynasty. Clerical script simplified the complex strokes of Qin's seal script (篆书), removing many intricate and decorative lines. This made the characters more concise and easier to understand. The changes in clerical script allowed for simpler and more convenient writing compared to seal script, significantly improving writing speed and efficiency. At the time, lower-level officials commonly used this script as it was better suited for daily use.

The transition from seal script to clerical script enabled more people to learn and write Chinese characters, facilitating their spread. The government's widespread use of clerical script for drafting administrative documents and disseminating them also contributed to the promotion of Chinese characters across broader regions.

After simplifying seal script, clerical script developed its own artistic expressiveness. It employed more varied and dynamic strokes, with differing thicknesses, to convey a sense of flowing beauty, striving for a natural, almost water-like fluidity. This marked the beginning of a shift in Chinese writing from mere practicality to artistic expression.

Additionally, the character shapes in clerical script closely resemble the forms of modern Chinese characters, highlighting its transitional role in the evolution of Chinese writing. As a crucial bridge between seal script and regular script (kaishu, 楷书), clerical script established the square structure and standardized strokes later regarded as the "soul of Chinese characters."

After the Han Dynasty, China entered the period of the Wei, Jin, and Southern and Northern Dynasties. During this time, nomadic tribes from the north moved southward, leading to regions where different ethnic groups lived together, fostering cultural and customary exchanges. One distinctive feature of this era was the emergence of a script known as Wei Bei (魏碑).

In the history of Chinese characters, Wei Bei occupies a transitional position between clerical script (隶书) and regular script (楷书). It retained some characteristics of clerical script while further developing toward a more square and upright style. This script was often used for inscriptions on stone monuments commemorating great figures, giving it a solemn and powerful aesthetic.

Because Wei Bei was typically carved into stone, its style also reflected a rugged, unrestrained quality. At the same time, it combined the bold and rough spirit of the northern regions with the delicate and refined elegance of the south, embodying the cultural exchange and integration of this period.

Due to its use of durable stone as a medium, many examples of Wei Bei have been well preserved to this day, providing valuable material for studying the development of Chinese characters. Even today, many calligraphers draw inspiration from Wei Bei in their creative works.

After this period, the Tang dynasty, Chinese character developed to a brand new stage. As China reached one of its historical peak. There has been tremendous development in both the economic and cultural fields. The popular style of calligraphy in this stage is regular script, or Kaishu(楷书) in another word. Regular script was deeply impacted by Weibei. This could be found through observation or compare these two writing style. Kaishu remain the sense of potency of Weibei, but also has its own characteristic.

To sum up, through a long history, Chinese characters never stop its development. Based on the writing tools and the objects to write on, the style of scripts kept changing. And also, as the society is developing, aesthetic standards keep changing. The aspire to beauty pushed the development of Chinese characters to change at the same time. This means that Chinese characters kept developing to follow the society, from Shang dynasty to Tang dynasty, from inscriptions on bones or tortoise shells to regular script.

There always be an argument, that some people consider Chinese character has already been obsolete in modern days. This is not a new theory. at the late time of Qing dynasty and Republic of China. The advanced technologies shocked the traditional Chinese society with new weapons, steam boats. Goods are not the only thing that brought to China. More and more Chinese people considered that except technology, there must be something else which make the western countries powerful. The government found by Sunzhongshan took the place of Qing, the last dynasty of China.

In addition to abolishing the feudal customs left by the Qing Dynasty, the Republican government also adopted a proactive attitude toward the culture of the Western world. Historically, the Chinese people, who had always taken pride in their status as a "Celestial Empire," began to question their traditional culture after being thrust into the era of the Industrial Revolution by Western powers. At that time, the country had a large illiterate population, and some scholars proposed that in order to eliminate illiteracy quickly, the complex Chinese characters should be abandoned in favor of using Latinized letters. This marked a significant setback for the historical development of Chinese characters in modern times.

With the advancement of technology, many governments worldwide adopted typewriters, but China, with its character-based language, struggled to find a suitable machine. For alphabetic languages, a typewriter only needed to arrange a few dozen letters, whereas Chinese required two to three thousand commonly used characters. Although some individuals attempted to design various structures for Chinese typewriters, most were overly complex, difficult to operate, and inefficient. It can be said that the Chinese writing system faced enormous challenges in the wake of the Industrial Revolution.

Apart from China, several other countries in East Asia have historically been deeply influenced by Chinese culture and have used Chinese characters. Japan, Korea, and Vietnam all utilized Chinese characters at some point in their histories. However, for various reasons and purposes, both Vietnam and Korea eventually abandoned the daily use of Chinese characters, opting instead to use phonetic symbols for recording and writing.

However, Chinese characters were preserved in their place of origin, China. To promote literacy more effectively, the new government of the People's Republic of China continued

and expanded upon the simplified character policies that had already emerged during the Republican era. Throughout history, many Chinese characters often had multiple variants, known as their “variant forms.” An important aspect of the simplification process was to identify these variant forms and select the ones with simpler strokes to serve as the new standardized forms. Simplified characters ultimately achieved widespread success and became the standard script still used in mainland China today.

Entering the internet era, typing Chinese characters on computers became another significant challenge. However, with the invention of various input methods, including the widely used “Pinyin Input Method,” Chinese characters can now be used seamlessly on computers.

The development of Chinese characters has spanned thousands of years, and they are still used by over a billion people worldwide today. The large population and frequent usage ensure that Chinese characters retain their vitality at all times. Moreover, when expressing the same article in several widely used languages today, the Chinese version is always more concise. This is because Chinese characters carry a higher information density, allowing for profound meanings to be conveyed succinctly. This characteristic also provides room for the pursuit of linguistic beauty in Chinese literature.

Therefore, I believe that from both historical and modern perspectives, Chinese characters will neither decline nor disappear. They will continue to exist in the future, accompanying the people of this land through new eras.

References

1. Baidupedia(Baidubaikē) entry “Chinese character”.
2. Open source information of historical works of seal script, official script, regular script.
3. *Zhangmenglongbei*(张猛龙碑) AD 522.
4. Ouyangxun(AD 557-641) “*Jiuchenggongliquaning*”(九成宫醴泉铭).
5. Fangjianxun “*General knowledge of Chinese calligraphy*”(中国书法通识).

The Comparative Study of Bilingual Education models of Japan and China

ZHOU CHUYAN

Bilingual education has become an increasingly important topic in the context of globalization, and as important countries in Asia, Japan and China have each developed different models of bilingual education within their unique historical, cultural and social contexts.

Bilingual Education in Japan

In Japan, bilingual education is basically a study of a second language in English. It has been considered a priority of Japanese education because it is seen as a significant language for international communication and economic development. English is a compulsory subject from elementary school to high school in Japan. However, Japanese students have been criticized for not being capable of speaking good English for many years.

This problem is rooted in the Japanese language and the traditional way of teaching. Japan has a writing system that employs kana (hiragana and katakana) and kanji, which is very different from English phonetics. Therefore, students cannot easily grasp the pronunciation and intonation of English. Additionally, English education in Japan has been focused on grammar, vocabulary, and reading comprehension, which were mainly to prepare students for entrance exams, without focusing on practical speaking skills.

For example, most classrooms require students to memorize words and sentence patterns but offer little opportunity for authentic English communication. The approach of exam-oriented teaching has resulted in the “mute English” phenomenon, where most of the students are able to read and write in English but not communicate in everyday life.

Recently, international schools and English immersion programs have come up, providing students with opportunities to use the language in more authentic settings. These programs, however, are highly concentrated in big cities such as Tokyo and Osaka, thus not reaching many students from rural areas.

The Development of Bilingual Education in China

China’s bilingual education is broader in scope compared to Japan. Apart from English education, China places great emphasis on the preservation and development of minority languages because it is a multiethnic country where minority languages play a critical role in cultural heritage.

In China, English is a compulsory course from the third year of primary school. In addition, there are plenty of English educational resources, especially in big cities. Most schools have internationalized textbooks and greatly value listening and speaking. Students quite often practice speaking through group activities, which may be in the form of an English corner or a speech contest. Furthermore, with more students taking

part in international English exams such as IELTS and TOEFL, the emphasis on practical communicative ability has been enhanced further.

However, English education resources mirror the urban-rural gap seen in Japan, and remote ethnic minority areas suffer from a lack of competent teachers and inadequate facilities, culminating in students with significantly lower competency in English. Another aspect, bilingual education also includes both Mandarin and minority languages in these regions. Consequently, in some regions, the higher priority given to Mandarin has led to lesser use of minority languages; students' proficiency in their native language and their cultural identity may be threatened. In some regions such as Xinjiang and Tibet, schools are increasingly providing more emphasis on instruction in Mandarin rather than minority languages.

Similarities

Although the Japanese and Chinese approaches to bilingual education have various differences, there is much similarity between them too. First, both countries regard English education as a vital tool for internationalization and hence place it at the heart of the school curriculum. Second, there is a gap between urban and rural areas in the quality of English education in both countries. The rural areas of Japan have fewer opportunities than cities to engage with native speakers or to attend an international school, while remote areas of China are devoid of quality English education.

Besides, balancing language learning against the retention of culture is an issue both countries share. Whereas Japan is moving ahead, forcing English education above all else, almost no policies in other foreign or local languages protect, such as Ryukyuan or Ainu, making cultural diversity at a minimum. Though some policies do provide support for minority languages in China, the predominating role of Mandarin in education gradually shrinks their space.

Differences

Despite a lot of similarities in bilingual education in both Japan and China, there are still many significant differences.

First, the development of speaking skill is closer to practical use in China. While studying grammar, vocabulary, and reading, students in Chinese classes are immediately encouraged to converse with each other and make presentations. Schools in many places ask students to develop activities like English corners and speech competitions to promote speaking practice. Grammar and vocabulary are mainly emphasized in Japanese classrooms, but the chances of real communication are scarce. Japanese students' learning of English is driven by exams, with teachers more concerned with written expression and preparation for exams than oral skills. In order to improve, Japanese students need to practice more grammar and work at correcting

pronunciation. The teachers should place more emphasis on speaking practice and communication rather than just exam preparation.

While in China, it encompasses a wider range of languages, including Mandarin, minority languages, and English in bilingual education. In ethnic minority areas, students have to study both Mandarin and their local languages—for example, Tibetan or Uighur—with the purpose of helping to preserve cultural diversity. However, in most areas, more emphasis is being given to Mandarin and the usage of minority languages is minimized hence undermining proficiency in students' own native language. In contrast, Japan's bilingual education focuses largely on Japanese and English because Japan is a relatively homogeneous society, there is less need to protect multiple languages.

Challenges and Opportunities

Although both Japan and China have setbacks in terms of bilingual education, Japan has to overcome the weaknesses of its test-oriented educational system, which strongly limits the opportunities for enhancement of speaking skills. Increase English immersion opportunities—increase exchange programmes or employ multimedia tools in teaching—and the Japanese students might get a chance to improve their speaking skills as well.

The main challenge for China is the elimination of the gap in urban and rural education. Most of the rural areas seriously lack qualified teachers and resources, which negatively affects the quality of English education. Besides, the balance between Mandarin and minority language teaching is quite sensitive. In some minority regions, students focus more on mastering Mandarin and English; as a result, their proficiency in their native languages may decline. This might be addressed by China through better teacher training, more resources, and integrating cultural preservation with language education.

Meanwhile, both Japan and China have great opportunities to improve the current situation of bilingual education. Supported by an unprecedented development of technology, the online education platforms and AI language learning tools can make language learning in favor of even a relatively remote area. Moreover, some Japanese-Chinese exchange programs can also help promote improvement in teaching in both countries.

Conclusion

The bilingual education systems in Japan and China reflect their unique cultural, historical, and social contexts. Japan primarily uses English as a tool for internationalization, while China promotes English education alongside efforts to preserve minority languages.

With the rapidly developing globalization, bilingual education will continue to be one of the most salient areas in educational reform within both countries. By addressing these

challenges and leveraging technology and international cooperation, Japan and China can enhance their bilingual education systems. This not only better equips students to avail themselves of global opportunities but also helps to preserve their respective cultural and linguistic heritages.

A balanced reflection on China's strength: Examining the military, social, and economic contradictions from within

Composed by: Mingzhi Tang

INTRODUCTION

This academic paper shall discuss the most non-neglectable power, People's Republic of China. Within several aspects throughout history and contemporary events, and what could we learn from the history. Since our history book is the best encyclopedia, intelligent and long enough for us to deal with the most difficulties or the barriers we might encounter.

After the history reading, we could know there once were four magnificent ancient cultures, including Ancient Egyptian Culture, Ancient Chinese Culture, Ancient Mesopotamian Culture, and the Ancient India Culture. Nonetheless, none of them exist continuously but Ancient Chinese Culture.

However, China, as an ancient power, could even be described as a culture that camouflaged in a country; that never ceased to exist in the past 40 centuries, from the new-paleolithic era towards the 21th century.

China's meteoric rise to global prominence has redefined the balance of power in the 21st century. As the world's second-largest economy and a dominant military force, China wields significant influence on the global stage. Yet, beneath this facade of strength lies a series of contradictions—social inequality, economic vulnerabilities, and geopolitical challenges—that raise critical questions about its sustainability as a superpower. This essay explores the balance between China's strengths and its internal contradictions, focusing on its military, social, and economic dimensions. By examining these aspects, it aims to provide a nuanced perspective on China's rise and the challenges it faces from within.

But why? Why is China (The Huaxia culture) the only exception to human history? Even during the 19th and 20th century, this country was devastated by the aggressors. But these challenges did not overwhelm this culture, how could that be?

LETS IMMERSE TO THIS ESSAY AND FIND OUT THE REASONS, SHALL WE?

* The citation will be indicated in the end of this paper, within () filled with number

Chapter I: The RECOVERY of Military

IN 1949, the long and bitter civil war between the Chinese Communist Party and the Chinese Nationalist Party came to an end. This moment not only marked the conclusion of this conflict but also signaled the end of over a century of instability and turmoil for China. After enduring decades of war, foreign intervention, and internal strife, the nation finally welcomed a new leadership under the Chinese Communist Party, promising peace and stability for its ancient land.

However, due to lack of development, time, and resources of China's local military factories and local investment, the aftermath is relatively difficult to maintain the logistics while the weapon could follow the single system, while the ammunition might not be supplied efficiently. According to the memory and the records of PLA's veterans, the logistics of ammunition during the Korean war usually depended on the seizing from the enemy, there were roughly over 110 different kinds of rifle, with 13 different calibers. Plus, during that period, Chinese military factories could only produce around 1000 tons of ammunition for the frontier daily, while the total demand of the frontier was around 10000 tons on a daily basis. (1) But fortunately, the PLA won this war or at least maintained their strategic interest profoundly. Meanwhile, the Korean war did a splendid and prestigious declaration of this new republic to the rest of the world——— Chinese people are getting rid of the disrespectful title "Sick Man of Asia" successfully.

Objectively, this war taught PRC a great lesson of the military's importance and never shall be neglected, the impact has so profoundly that even the repercussions are still affecting today's China and her citizens.

In the 1960s and 1970s, China pursued self-reliance, establishing a robust defense industry. The development of nuclear weapons and intercontinental ballistic missiles underscored China's growing military ambition. However, economic constraints and political upheaval, such as the Cultural Revolution, slowed progress. Deng Xiaoping's reforms in the 1980s marked a pivotal shift, prioritizing economic growth while downsizing the military to focus on quality over quantity. The introduction of the "Four Modernizations," with defense as a key pillar, laid the foundation for technological advancement in the PLA.

The development of aircraft carriers was a critical milestone in China's modernization. The commissioning of its first carrier, *Liaoning*, in 2012 marked China's entry into blue-water naval operations. This was followed by the domestically built *Shandong* in 2019, symbolizing the country's capacity for independent naval innovation. These carriers enhance China's power projection in the Asia-Pacific and beyond, especially in strategically significant areas like the South China Sea.

China's strategic military policies, such as the "Active Defense" doctrine, emphasized deterring potential threats while safeguarding territorial sovereignty. The establishment of the Strategic Support Force in 2015 underscored China's focus on space, cyber, and electronic warfare. From 2010 onward, efforts to modernize the PLA accelerated, with advancements in stealth aircraft, hypersonic missiles, and integrated command systems.

By 2020, China's military transformation reflected its ambition to protect national security and assert its presence on the global stage, driven by clear policies and strategic investments in innovation.

Nevertheless, in December 2024, Chengdu Aircraft Industry Group and Shenyang Aircraft Corporation had published two new sixth generation fighters, speculated as number J-36. China's pursuit of 6th-generation fighter jets represents another leap forward in military technology. These cutting-edge aircraft, featuring advanced stealth, artificial intelligence, and drone swarm capabilities, have profound implications. For ordinary citizens, the increased military expenditure may divert resources from public services, yet it instills national pride and

a sense of security. For the PRC, such advancements solidify its position as a global superpower, ensuring technological parity—or superiority—over rivals like the United States. These fighters serve as symbols of China's military innovation and commitment to securing its sovereignty.

However, for foreign rivals, the rise of 6th-generation fighters heightens security concerns, potentially sparking a new arms race and escalating regional tensions, particularly in Asia-Pacific flashpoints. By 2020, China's military transformation reflected its ambition to protect national security and assert its presence on the global stage, driven by clear policies and strategic investments in innovation.

In conclusion, the newborn republic reclaimed her strength through the revival of her military might. Rising from the fragmented remnants of war, the People's Liberation Army transformed into a unified force, embodying the resilience and determination of a nation eager to protect her sovereignty. In just 70 years, China turned a struggling army into a modernized military power, one that stands as both a shield for her people and a symbol of her renewed strength. The echoes of an ancient legacy now resonate in the disciplined ranks of this revitalized force, reminding the world that the republic, though young, has firmly reclaimed her place in history.

Chapter II: Boom without Bust on Economy

AS we all know, China's economy has experienced a dramatic surge during the last 40 years, followed by over 10% rates of increasing annually. Nonetheless, while the Reform and Opening-Up of 1979 is often celebrated as the defining moment of China's economic transformation, the significance of the preceding three decades cannot be overlooked. From 1949 to 1979, the newly founded People's Republic of China grappled with monumental challenges, including economic isolation, political upheaval, and social restructuring. Though this period is frequently labeled as one of turmoil and chaos, it laid critical groundwork for the reforms that followed. The establishment of state-owned industries, the focus on self-reliance, and the unification of a fragmented economy provided a foundation for future growth. Without these early efforts, the rapid advancements of the post-1979 era would have been far more difficult to achieve. This chapter explores how the seeds of China's 'boom without bust' were planted during these formative years and blossomed into an economic miracle after the pivotal reforms of 1979.

First of all, China's resilience in countering the economic crisis shall be absolutely considered extraordinary. Unlike some economies that always succumbed to volatility, China successfully navigated three major economic shocks—the Asian Financial Crisis of 1999, the Global Financial Crisis of 2008, and the COVID-19 pandemic in 2020—while maintaining stability and momentum.

During the 1999 Asian Financial Crisis, China's limited financial liberalization and stable renminbi (RMB) shielded it from the currency collapses and capital outflows that destabilized neighboring economies. The decision to maintain a fixed exchange rate demonstrated the government's commitment to stability, a hallmark of its long-term economic planning.

The 2008 Global Financial Crisis tested China's dependence on exports, as global demand plummeted. In response, the government enacted a \$586 billion stimulus package,

channeling investments into infrastructure, housing, and employment through state-owned enterprises. This approach not only cushioned the impact on domestic industries but also showcased the strength of China's centralized economic control.

In 2020, the COVID-19 pandemic presented unprecedented challenges. Yet, swift containment measures, a thriving digital economy, and targeted financial support ensured a rapid recovery. By leveraging its manufacturing base to stabilize global supply chains, China underscored its role as a cornerstone of the global economy.

These crises reveal that China's resilience is not a product of chance but of deliberate policy choices rooted in the reforms of 1979. By maintaining strong state oversight, fostering domestic demand, and prioritizing infrastructure development, China avoided the boom-and-bust cycles that have plagued other economies. This capacity to thrive amid global uncertainty underscores the depth and foresight of China's economic strategy.

UPON reflection, I discerned one vital spark that kindled the engine of China's economic ascent, propelling her toward unprecedented growth.

The Reform and Opening-Up policy introduced by Deng Xiaoping in 1979 marked a pivotal moment in China's modern history, laying the groundwork for its economic transformation. Recognizing the inefficiencies of the centrally planned economy, the Chinese government adopted market-oriented reforms to stimulate growth while maintaining state oversight.

A key aspect of these reforms was the decentralization of economic power, allowing provinces and local governments to implement policies tailored to their regions. This flexibility encouraged competition and innovation, which proved instrumental in fostering economic growth. For example, by 1984, coastal cities like Shanghai and Guangzhou began experimenting with foreign trade and investment, with noticeable results in GDP growth.

One of the most significant outcomes of these reforms was the establishment of Special Economic Zones (SEZs). The first four SEZs—Shenzhen, Zhuhai, Shantou, and Xiamen—were launched as experimental zones to attract foreign direct investment (FDI) through tax incentives, minimal regulation, and improved infrastructure. Shenzhen, in particular, transformed from a small fishing village into a global technology hub within decades. By 2020, Shenzhen's GDP exceeded \$430 billion, a testament to the effectiveness of these policies.

Moreover, China's accession to the World Trade Organization (WTO) in 2001 solidified its integration into the global economy. Between 2001 and 2010, China's exports grew at an average annual rate of 20%, helping it surpass Germany to become the world's largest exporter by 2009. This achievement was supported by reforms that streamlined trade regulations and encouraged private sector participation in global trade.

The introduction of the Household Responsibility System in the agricultural sector further exemplifies the success of these reforms. Farmers were allowed to lease land from collectives and sell surplus produce in markets, resulting in a significant increase in productivity. Grain output rose from 305 million tons in 1978 to 407 million tons by 1984, reducing rural poverty and providing a stable foundation for broader economic growth.

By dismantling rigid state controls, encouraging foreign investment, and gradually integrating into the global economy, the reforms ignited the engine of China's economic development. These policies not only increased GDP growth, averaging nearly 10% annually for four decades, but also lifted over 800 million people out of poverty—a feat unparalleled in human history.

Chapter III: Contradictions from the Society

China's rise to global prominence has brought extraordinary advancements in its economy, military, and international influence. Yet, beneath this ascent lie societal contradictions that reflect ongoing struggles with cultural identity and self-perception. On platforms like Weibo and Douyin, trends such as the 'easy girl' phenomenon—criticizing Chinese women who date foreign men—and lingering low self-esteem toward foreigners reveal deeper insecurities, even as China asserts itself as a global superpower.

These contradictions highlight the psychological impact of historical humiliation and the tensions between globalization and national pride. By examining these trends, this chapter explores how social media magnifies the interplay between past and present, exposing the complexities of a society navigating its newfound strength.

These societal contradictions, amplified by the rapid rise of social media, serve as both a reflection and a magnifier of the tensions within modern Chinese society. Among these, two prominent trends stand out. The first is the 'easy girl' phenomenon, a contentious discourse critiquing women who pursue relationships with foreign men, igniting debates on national pride and gender roles. The second is the enduring sense of cultural inferiority toward foreigners, even as China's global influence rivals that of the West. By examining these trends, we gain insight into how social media reveals the complexities of national identity in an era of unprecedented change.

1: Social Media as a Reflection of Societal Contradictions

In contemporary China, social media platforms like Weibo, Douyin (the Chinese counterpart of TikTok), and Xiaohongshu (Red) have become integral to daily life, serving as both mirrors and amplifiers of societal attitudes. These platforms provide spaces where cultural pride coexists with deep-seated insecurities, revealing contradictions within the social fabric.

On one hand, there's a palpable sense of national pride, with users celebrating China's advancements in technology, infrastructure, and international influence. On the other hand, certain trends expose underlying tensions, particularly in perceptions of gender roles and attitudes towards foreigners. The "easy girl" phenomenon is a pertinent example, highlighting complex dynamics in societal values and self-perception.

2: The "Easy Girl" Phenomenon

The term "easy girl" has gained traction on Chinese social media as a derogatory label for women perceived to be overly eager to form relationships with foreign men, often viewed as of lower socioeconomic status. This trend has sparked significant controversy and debate online.

Origins and Usage:

The "easy girl" label is frequently employed in discussions criticizing Chinese women who date or marry foreigners. Such women are often stigmatized, with assumptions that they are betraying national pride or seeking personal gain. This discourse is prevalent on platforms like Bilibili, a video-sharing site with a substantial youth user base.(2)

Societal Reactions:

This phenomenon has ignited polarized debates. Some netizens express strong nationalist sentiments, condemning these women for allegedly devaluing Chinese culture and succumbing to foreign allure. Others argue that such relationships are personal choices and should not be subjected to public scrutiny or moral judgment.

3: Low Self-Esteem Towards Foreigners Despite National Power

Despite China's rapid ascent as a global superpower, a paradoxical trend persists: segments of the population exhibit low self-esteem in relation to foreigners, often idealizing Western lifestyles and undervaluing domestic achievements.

Manifestations:

- **Consumer Preferences:** There's a noticeable preference for foreign brands, perceived as superior in quality and status, even when comparable domestic products are available.
- **Cultural Idealization:** Western beauty standards and lifestyles are often glorified, influencing fashion, entertainment, and personal aspirations.

Contributing Factors:

- **Historical Influence:** The legacy of foreign invasions and colonialism has left psychological imprints, leading to an internalized sense of inferiority in some individuals.(3)
- **Educational Emphasis:** Historically, China's education system placed significant focus on Western ideologies and languages, inadvertently elevating foreign cultures above indigenous ones.

Social Media Dynamics:

Platforms like Weibo and Douyin serve as arenas where these attitudes are both challenged and reinforced. Nationalistic content promoting Chinese achievements coexists with content that idolizes foreign cultures, reflecting the ongoing internal conflict

4: Cultural Shifts and Emerging Pride

In response to these contradictions, there's a burgeoning movement aimed at reclaiming and celebrating Chinese cultural identity.

Guochao Movement:

The "Guochao" (literally "national tide") trend epitomizes this cultural resurgence. It involves:

- **Embracing Traditional Aesthetics:** Incorporating traditional Chinese elements into modern fashion and design.
- **Supporting Domestic Brands:** A renewed interest in homegrown brands that blend cultural heritage with contemporary appeal.

• Promoting Indigenous Culture: Increased appreciation for Chinese art, music, and literature, often showcased and popularized through social media.

Impact on Society:

This movement signifies a shift towards greater national self-confidence, particularly among younger generations. It challenges the previously entrenched notion that foreign equals superior and fosters a more balanced cultural self-perception.

Social Media's Role:

Platforms like Xiaohongshu have been instrumental in promoting Guochao, with influencers and users sharing content that highlights traditional crafts, local fashion brands, and cultural practices. This digital dissemination has amplified the movement's reach and impact.

In summary, the interplay of these social media trends reveals a complex tapestry of societal contradictions in modern China. While the nation strides confidently on the global stage, internal challenges persist in harmonizing national pride with individual self-perception. The "easy girl" phenomenon and lingering low self-esteem towards foreigners underscore the nuanced struggles within Chinese society. However, the rise of movements like Guochao offers a promising path towards a more cohesive and confident cultural identity, suggesting a society in the midst of redefining its place in the world and its understanding of self-worth.

CITATION:

(1):<https://www.baidu.com/s?wd=豆包>

Al&rsv_spt=1&rsv_iqid=0xa42fe4dd005b8343&issp=1&f=8&rsv_bp=1&rsv_idx=2&ie=utf-8&tn=baiduhome_pg&rsv_dl=tb&rsv_sug3=19&rsv_enter=1&rsv_sug1=7&rsv_sug7=101&rsv_sug2=0&rsv_btype=i&inputT=3546&rsv_sug4=3546

(2)Huang, C. (2022). Chinese 'Incels'? Misogynist Men on Chinese Social Media. *Made in China Journal*, 7(2), 10.

(3):Zhang, H. (2020). Racialization of Foreigners and Self in the Chinese Immigration Context. *Macalester College Sociology Honors Projects*, 76.

(4):"Confidence comes from treating others as equals." *Global Times*, 2015.

156 years: How Hong Kong came to be

An evaluation on the development of Hong Kong's political system during British colonial administration.

written by:CH

Foreword

For the greater part of history, Hong Kong was nothing more than just a series of anonymous coastal and inland walled villages off the mouth of the Pearl River Delta. While political turmoil and social instability swept the Central Plains, overseeing the transition of power of numerous ancient Chinese dynasties; Hong Kong, on the other hand, due to its isolated geographic position and lack of development, remained largely unnamed and unmentioned in the chronology of Chinese and world history.

Little to no one realized, however, that such an unremarkable piece of territory would eventually spring up to become a metropolis, a city of over 7.5 million residents, a melting pot of Oriental and Western culture, and one of the leading financial centres of East Asia. This, for the most part, was the result of an Empire's ambitious expansion to every corner of the globe.

By the early 19th century, the British Empire, half the world away from Asia, had been eager to trade with the Qing Dynasty for products such as tea, silk, and porcelain[1]; Britain, however, failed to balance its amount of imports with exports, as China demanded large amounts of silver, a commodity the British deemed impractical to come by. Counterbalance in Sino-British trade came in the form of exports of opium grown in India consequently.

A devastating impact would later reveal itself, as smoking addictions started developing among the Chinese population, leading to a considerable amount of social and economic disruption. Though the Imperial Government made efforts to illegalize opium trade intermittently, failure became apparent as imports kept increasing due to smugglers and colluding officials instead[2].

In 1834, the Daoguang Emperor charged General Governor Lin Zexu with ending the opium trade. He did so by seizing all opium in Canton, and eventually had them destroyed at Humen, close to Canton on the Pearl River Delta[3]. A British military response, and a decisive victory would soon follow. This major military conflict, later known historically as the First Opium War, was concluded by the Treaty of Nanking, the first of a series of unequal treaties between Imperial China and the Western Powers[4]. Hong Kong Island, as well as neighboring islands, would be permanently ceded to Britain. Over the course of several decades, British Hong Kong would expand, including the Kowloon Peninsula(through the Second Opium War and the Treaty of Tientsin, 1858), and the New Territories(through the Convention for the Extension of Hong Kong Territory, 1898, a lease expected to expire 99 years later) into its boundaries.

Hong Kong's political system is one that is evolutionary; a continuum dependent on its ever-changing social structure, but also the geopolitical situations of its regional neighbours, as well as the international community.

With the historical context on the colonization of Hong Kong briefly covered, this essay would analyze the development of the Hong Kong political system during British colonial administration, starting from 1841, the cease of Hong Kong Island, up until the Transfer of Sovereignty in 1997.

Early Stage: 1841-1898

This period of the British colonial era is marked by its absence of political representation. With a population whose ethnicity was (and still is) overwhelmingly Chinese, that meant a challenge in terms of governance for the British minority. Take the overall population of Hong Kong in 1861 (excluding the New Territories) as an example. Of the 119,320 residents residing in the territory, 116,335, or over 90%, were Chinese[5]. This meant the Governor, appointed directly by the central government in London, had to appoint administrators and make decisions without input from the local population. Chinese representation in government and politics remained a major issue for the most part of the early period, as the political structure was largely in favour of the British elite, and that the Governor exercised almost absolute authority over the executive and legislative branches. All bills, including those passed by the Legislative Council, needed consent from the Governor, which meant the Governor had the ultimate veto power in all proposed bills in government[6]. Changes and amendments, however, were present in the latter half of the era, as Ng Choy and Wong Shing (both of Chinese ethnicity) became unofficial members of the Legislative Council. Amendments were also made to the Letters Patent, stating that not only advice, but also consent was required from the Legislative Council when enacting laws[7]. Nonetheless, this period of colonial administration was characterized by its lack of political representation from the Chinese majority.

Prior to WWII: 1899-1941

The first half of the 20th century oversaw an expansion in governance and local integration, though limited and minor. While more measures were introduced to integrate a small, elite faction of the Chinese population into the governing structure, the Governor continued to wield significant authority, and that the Chinese elite mainly focused on economic matters, rather than political ones.

Prominent colonial features continued to be present during this era. The Hong Kong government would prioritize those of foreign origin into admission for occupations regarding administration, including inspectors of police, jailors, and clerks of many government institutions, while opportunities were rarely given to the Chinese[8].

This period also oversaw the overthrowing of the Qing Dynasty, the establishment of the Republic of China, and thus, waves of nationalist movements throughout Hong Kong and the Chinese mainland. The British were cautious in their approach to reform as a result.

WWII and the Aftermath:

Hong Kong, along with many other European colonies in South East Asia, fell under the attack and occupation from the Japanese Empire during WWII. It was until 1945, when Japan surrendered to the Allied Powers, that Hong Kong, and many other territories were liberated. British administration resumed in Hong Kong afterwards.

With the British economy in shambles due to large amounts of capital and resources being spent on the war effort, the Empire could no longer hold on to its faraway colonies. Waves of independence movement and nationalist fervour would go on to sweep multiple regions in the coming decades, accelerating the pace of decolonization, and the fall of the British Empire. Amidst the tides of anti-imperialist movements around the globe, Mark Young, after resuming his position as Governor, made an attempt on reforms in the Hong Kong political system by orders of the British Government in London. He suggested reform that would “give(the Chinese majority) a fuller and more responsible share in the management of their own affairs”[9]. According to the constitutional reform proposal that would later be called the “Young Plan”, a Municipal Council, constituted on a fully representative basis, would be established to “encourage all communities in Hong Kong to a more active participation in the administration of the territory”[9]. This proposed plan, however, never took place, as there was opposition in both the government and the top elites[10]. Moreover, fear of tensions(from the Foreign Office) between the Hong Kong colonial government and the newly established communist regime in Mainland China, and actions of retrocession of Hong Kong further prevented the implementation of the “Young Plan”[11]. Despite the failure of the radical reform, this period signified a slightly obvious approach to an open government.

The 67 Riots: A turning point for Hong Kong:

The late 1940s to early 1950s is said to be the beginning of the Cold War, a series of proxy wars between regional communist and capitalist powers under the influence of the two global superpowers: The United States and the Soviet Union. While conflict shook the Korean Peninsula and Vietnam; Hong Kong, under British rule, remained relatively uninvolved in this global clash. Internal conflicts, on the other hand, began to escalate due to rising tensions between the new communist regime in China, and the Nationalists who fled to Taiwan, eventually causing the 1956 “Double Ten” Riots, a series of bloodshed between local Nationalists and Communists supporters[12]. Another riot a decade later, however, would be the turning point that altered the course of the development of the Hong Kong political system.

On May 1966, Mao Zedong, chairman of the Chinese Communist Party, initiated the Cultural Revolution, an event some scholars speculated to be a criticism against sole party officials with the likes of Liu Shaoqi and Deng Xiaoping for being “capitalist roaders”, and an attempt to regain power in the party[13]. Labour unrests in Hong Kong, coupled with the Cultural Revolution in Mainland China, became the cause to the outbreak of the 67 Riots, leading to a series of anti-capitalist, anti-imperialist strikes and violent clashes against the colonial government, led by local leftists groups, newspapers and schools, with support from Beijing.

Through the events of 67 Riots, the colonial government, under the governorship of David Trench and Murray MacLehose, found a radical reform on political and social structure necessary in order to increase social cohesion, encourage the “Hongkonger” identity, and restore confidence towards the colonial government. One major issue the government had to tackle in order to do so was the corruption within government institutions and disciplinary services. Although such issues were already apparent since the early 1960s, countermeasures were not present in solving it. One major policy after the riots that would continue to affect government institutions and the political system in the present day was the establishment of ICAC, or Independent Commission Against Corruption, an independent investigative agency directly reported to the Governor and aimed to combat corruption. To enhance communication with local residents regarding regional matters, an attempt on reforms on regional administration was made, in the form of the introduction of the City District Officer Scheme, as “the first sign of reaching out to the ordinary people” in Hong Kong society[14]. The City District Officer Scheme would later be renamed to the more familiar “Home Affairs Department” in 1971. The Department is responsible for the assistance in regional administration, including elections of village representatives in the New Territories. The Governorship of Murray MacLehose also oversaw the start of an increase in the number of seats in the Legislative Council, from 26 in 1966, to 50 in 1973 and 56 in 1985, although some scholars questioned the effect it had on the political development in Hong Kong, commenting that members of the Executive and Legislative Council was appointed by the Crown rather than through elections, and that Hong Kong had never been a democratic entity during colonial administration[15]. Nevertheless, developments in the political system can be clearly seen, and that radical reforms implemented during this period would become the founding basis for an increase in quality of life, political participation in the general public, and a rapid economic growth that would possess a positive effect in Hong Kong society, even after 1997.

The Transition Period & the 1997 Transfer of Sovereignty:

In the 1980s, concerns started to spread regarding the future of Hong Kong, as the lease of the New Territories was expected to expire in 1997(signed in 1898, leased for 99 years). Talks had been made between governments of the United Kingdom and the

PRC about the Hong Kong problem, eventually leading up to the signing of the Sino-British Joint Declaration in 1984, which promised a high degree of autonomy, and maintenance of its existing governing and economic systems under the “One Country, Two Systems” policy for 50 years. During this period between the signing of the Declaration and the Transfer of Sovereignty, historically called the “Transition Period”, the colonial government took a radical approach to establish a representative democracy system to allow more participation in Hong Kong politics by local Hongkongers, as a way of reassurance to the public as Hong Kong approached the inevitable handover.

Hong Kong was to be divided into 18 districts, each with its own district council and management committee. This would be the founding basis for the District Council, founded in 1982. Over the course of a few years, elected seats would increase from one-thirds to two-thirds in total. 1985 saw the first indirect election of the Legislative Council, with 24 of the 56 seats elected through indirect means as well[16]. This was the result of recommendations from “The Green Paper: The Further Development of Representative Government in Hong Kong”, published in 1984.

One prominent figure in the development of the Hong Kong political system was Christopher Patten, Governor of Hong Kong from 1992 to 1997, who proposed an increase in directly elected seats in the Legislative Council. In the last election held in 1995, 20 seats were from geographical constituencies, the highest in record, while ex officio and appointed seats were canceled[17]. This reform sparked retaliation from the government in Beijing, who believed major changes were made without consent from China through the Sino-British Joint Liaison Group[18].

For the most part of the transition process, both British and Chinese governments resolved issues regarding the pace and steps of political reform in Hong Kong through means of negotiation and communication, despite disagreements were present[19]. The British government, however, wanting to accelerate the pace of reform on the whole, encouraged Hong Kong’s local political groups into participation in government. Many of Hong Kong’s political parties were established through stimulation from support of the British government and direct elections of the Legislative Council, including the United Democrats of Hong Kong, Liberal Democratic Federation of Hong Kong, Federation for the Stability of Hong Kong and more. Other parties were founded amidst the radical reforms promoted by Chris Patten, including pro-China parties, with the likes of the Democratic Alliance for the Betterment of Hong Kong(1992) and the Liberal Party(1993), while democratic-leaning United Democrats of Hong Kong, Meeting Point, and the Frontier(founded in 1996, merged into the Democratic Party later in 2008) merged into the Democratic Party. These parties engaged in fierce competition in the years prior to 1997. In 1994, 178 of the 384 members(51.4%) in the District Council possessed political party backgrounds, while 44 members in the Urban Council(59 in total) were representatives of a political party, taking up 75.4%[20]. These results are a clear indication of the success of the implication of party politics in

Hong Kong. Members of these political parties became active members in both councils and government, and thus, largely influenced the directions of policy-making and governance of the city, during the transition period and beyond 1997.

Conclusion:

Hong Kong has gone a long way in terms of political development. During the early decades of British colonial administration, reforms in the political system seen in the 80s and 90s were impossible due to the low level of trust from the colonial government, and since Hong Kong was of low economic and strategic importance to the wider British Empire, politics of the elite remained the status quo for the greater part of the 19th, and the first half of the 20th century. However, governments in both Hong Kong and London realized development in the political system was inevitable, as policies had to be adjusted according to contemporary social backgrounds, largely a result of the ever-changing geopolitical situations in the regional (in China, etc.) and global levels (Cold War, decolonization, etc.). Such radical changes were especially apparent as the Transfer of Sovereignty, and the subsequent concerns on Hong Kong's future came. It was also mostly during the "transition period" when the modern Hong Kong political system took shape. These developments during the 156-year British colonial era were sole factors in shaping not only the political system, but also in other aspects such as economic, social, and cultural, and ideological ones in contemporary Hong Kong society. As turbulent, unstable situations swept Mainland China and other regions in East Asia during the greater part of the 20th century, Hong Kong, on the other hand, was spared from waves of political upheaval for most of the time. Its status as a British colony meant that people from various regions flocked into the territory, mostly to flee from conflicts and to seek refuge. Under administration from a power half the world away, non-intervention in social and cultural aspects remained a prominent feature in local governance by the British elite, as an attempt to show respect to local customs, practices, and language, albeit its lack of political representation. Nevertheless, its characteristics and gradual political development was a key factor in the making of Hong Kong's unique culture, one that is a mixture of East and West, with a slice of Cantonese characteristics, and one that is significantly distinct from that of Mainland China, and the rest of East Asia. Hong Kong would also not have been one of the leading financial centres of East Asia, the modern example of economic development, and a city of cultural innovation had it not been for these gradual developments in the political system.

Citations:

[1]"Opium trade | History & Facts". Encyclopedia Britannica. 17 April 2015. Retrieved 1 August 2020.

- [2]"Opium trade – History & Facts". Encyclopedia Britannica. Retrieved 3 July 2018.
- [3]"China Commemorates Anti-opium Hero". 4 June 2009. Archived from the original on 14 November 2013. Retrieved 18 March 2014.
- [4]"Treaty of Nanjing" Britannica.
- [5]"The Population of Hong Kong" Fan Shuh Ching, Department of Statistics University of Hong Kong, The Committee for International Coordination of National Research in Demography, 1974
- [6]"Letters Patent" Articles 7-12
- [7]<https://www.legco.gov.hk/en/education/understand/timeline.html>, Historical development of the Legislature
- [8]"<https://chiculture.org.hk/tc/photo-story/2944>", Culture and life of pre-war Hong Kong society, Academy of Chinese Studies.
- [9]Tsang, Steve Yui-sang (1995). Government and Politics. Hong Kong University Press. ISBN 9622093922.
- [10]Lau, Siu-kai; Liu, Zhaojia (1984). Society and Politics in Hong Kong. Hong Kong: Chinese University Press. ISBN 9622013368.
- [11]Tsang, Steve Yui-sang (1995). Government and Politics. Hong Kong University Press. ISBN 9622093922.
- [12]香港1956年雙十暴動死傷 黨產會：KMT令救總善後、政府撥款. 自由時報. 2020-04-28 [2023-05-10]. (原始內容存檔於2020-05-12).
- [13]高華. 从《七律·有所思》看毛泽东发动文革的运思. 香港中文大學. 《炎黃春秋》. 2004年. (原始內容存檔於2021-01-11) (中文). 今天我要談的「文革的發動」包含兩個方面的問題：毛為什麼要發動文革？文革是如何發動起來的？我認為毛澤東發動文革有兩方面的動因，第一個因素：文革集中體現了毛對他所理想的社會主義的追求；第二個因素：他認為自己已大權旁落，而急於追回，這兩方面的因素互相纏繞，緊密的交融在一起。“
- [14]Cheung, Anthony B. L. (1997). "Rebureaucratization of Politics in Hong Kong: Prospects after 1997". *Asian Survey*. 37 (8): 722. doi:10.2307/2645446.

[15]趙雨樂、程寶美合編(編).《香港史研究論著選輯》.香港:公開大學出版社.1999.

[16]https://www.mpu.edu.mo/cntfiles/upload/docs/research/common/1country_2systems/2017_2/10.pdf, "香港政黨政治發展歷程淺議" 曹強, 曹晟, 澳門理工大學

[17]https://www.mpu.edu.mo/cntfiles/upload/docs/research/common/1country_2systems/2017_2/10.pdf, "香港政黨政治發展歷程淺議" 曹強, 曹晟, 澳門理工大學

[18] (前中央人民政府駐香港特別行政區聯絡辦公室副主任) 王鳳超.《香港政制發展歷程(1843-2015)》初版.中華書局(香港).2017. ISBN 978-988-8463-82-4.

[19]許家屯:《許家屯香港回憶錄》, 香港:聯經出版事業股份有限公司, 1993年, 第195頁。

[20]https://www.mpu.edu.mo/cntfiles/upload/docs/research/common/1country_2systems/2017_2/10.pdf, "香港政黨政治發展歷程淺議" 曹強, 曹晟, 澳門理工大學